

漢文の先生の漢詩

一 海 知 義

七十年近く前のことだが、私は中学三年の時（日本敗戦の前年、一九四四年）、京都から愛知県の飛行機工場に「学徒動員」され、級友たちとともに寮で暮らしながら、海軍航空機の部品造りをするようになった。

その年の暮、東海大地震が起こり、工場の壁が崩れおちて、上級生十三名の命が奪われた。それから半世紀、敗戦五十年を記念して、中学の同窓会が開かれた。それは十三名の追悼会でもあった。席上、一篇の漢詩を墨書したコピー紙が、みんなに配られた。当日出席されていた「骸骨」というアダ名の先生、かつての漢文の先生自作の漢詩であった。

当時の中学生は、先生にアダ名をつけるのが実にうまく、先生は五十年後も痩せ細って、ガイコツそのものだったが、嬰鑠かくしやくとしておられた。

詩は「題殉難学徒紅燃碑」という七言絶句だった。

花落水流懷旧時

友情無限不忘悲

十三玉折名長在

痛恨紅燃熱血碑

のちに私は同窓会誌から頼まれ、この詩に読み下し文を添え、若干の注解を加えたので、ここに抄録する。

殉難学徒紅燃の碑に題す

花落ち水流れて 旧時を懷えば

友情限り無く 悲しみを忘れず

十三の玉は折けて 名は長えに在り

痛恨す 紅燃ゆる熱血の碑

詩題および第四句に見える「紅燃碑」は、地震で亡くなった十三名を偲んで、戦後校庭に建てられた石碑である。

碑には「紅燃」の二文字が刻まれているが、戦時中われわれがよくうたった「学徒動員の歌」の一節、「ああ紅の血は燃ゆる」から採ったものであろう。ガイコツ先生の詩中の「紅燃熱血」、漢語としてはやや難があるが、これも右の歌詞に拠ったものである。

先生の詩は、和製漢語をふくむが、悲痛と悔恨の情が率直に表出されていて平明であり、ほとんど解説を要しない。贅語を加えることは、かえって詩意を削ぐ。

ただ「玉折」の二文字についていえば、この語、中国の古典に見え、すぐれたものが突然失われる、あるいは人が若くして命を失う、すなわち「夭折」の意をふくんでおり、先生の痛恨の情がとりわけこの二字に凝縮しているように思える。

*

同窓会誌は、次回の同窓会の時に配られた。それを見た級友の一人がきく。「漢詩というのは難しい。何か読むコツのごときものがあるのかね」

私の答えは、次のようなものだった。

別にコツはないけれども、ガイコツ先生の詩を例にとっていえば、次の二点は知っておいた方がいいだろう。

一、私たちは中学で教わらなかったけれど、漢詩には一定のリズム(言葉の切れ目)がある。先生の作品のような「七言」詩なら、原則的に次のような二つのリズム、AかBしかない。

2 / 2 / 2 / 1 (A)

2 / 2 / 1 / 2 (B)

先生の漢詩も、次のように作られている。

花落 水流 懐 旧時 (B) 友情 無限 不忘 悲 (A)

十三 玉折 名 長在 (B) 痛恨 紅燃 熱血 碑 (A)

中国の漢詩を例に挙げれば、たとえば李白の「山中幽人と対酌す」。

兩人 对酌 山花 開 (A) 一杯 一杯 復 一杯 (B)

我醉 欲眠 卿 且去 (B) 明朝 有意 抱琴 来 (A)

七言詩は五言詩の上に二字加えたものだから、五言詩のリズムは、

2 / 2 / 1 (A)

2 / 1 / 2 (B)

たとえば李商隱の「楽遊原に登る」。

向晩 意 不適 (B) 驅車 登 古原 (B)
夕陽 無限 好 (A) 只是 近 黄昏 (B)

これらA、Bのリズムを知っていれば、漢詩への恐怖は少し薄らぐ。

二、典故について。漢詩では、古典に見える故事、すなわち典故のある言葉をよく使う。

これを典故といい、先生の詩でいえば、すでに注した「玉折」。古典での使われ方を知らねば、「玉が折れるとは何だ」、ということになる。

それから……、と私は話を続けようとしたが、宴会が始まり中断した。級友には、「ぼくの『漢詩入門』(岩波ジュニア新書)を送るよ」といって、それぞれの席についた。

一海 知義(いっかい) ともよし

一九二九(昭和四)―。中国文学者。奈良県生まれ。

主な著書―『陶淵明 虚構の詩人』『漢語の知識』など。

・教科書収録教材

「桃いろいろ」『国語総合 古典編』(国総312)

「勉強」『精選国語総合』(国総313)

「春眠暁を覚えず」『新編国語総合』(国総314)

現代に生きる漢語

岸^{きし} 田^だ 知^{とも} 子^こ

(中央大学)

漢語とは何か。改まって定義しようとすると、意外にむずかしい。漢語とは、文字通りの意味でいうと漢族の言語を指し、中国語を漢語ともいうが、日本で漢語という場合はそうとは言い切れないのである。われわれになじみの「漢文」は現代中国語で古代漢語と呼ばれるが、そこに出てくる言葉とというのが一つの答えである。しかし、本来中国になかった言葉、「哲学」や「郵便」などの日本製漢語も多くある。そこで、漢語とは漢字で書く言葉であるとする、これには「手紙」「振替」などの訓読みのものも入ってしまう。したがって、日本で漢語という場合は、漢字でできた言葉で音読みするもの、というのが適当かと思われる。

私は勤務先のWEBサイトで「漢語百題」というコラムを連載していて、すでに百回を少し超えた。ここでは漢字や漢語について思いついたことを書いていて、厳密な意味では漢

語ではないものもある。その中で、漢語がもともとの意味とは違った意味で現在使われている例を取り上げることが多い。たとえば、「丈夫」は一人前の男をいうジョウウフから、健康であることや頑丈なことをいうジョウウフになり、「大丈夫」は立派な一人前の男の意味のダイジョウフから、危なげのないことをいうダイジョウフになって定着している。物事に通達した人物をいう「達者」は、体が健康なことをいうようになった。「人間」は、世の中をいうジンカンから、人をいうニンゲンになった。古くからの友人をいう「故人」は亡くなった人の意味になった。このように、もとの意味からすっかり変わって日本語としてなじみになっているものもかなりある。漢文を読むことには、なじみの漢語のふるさとに出会う楽しみもあるのである。

「対策」や「分野」も、もとの意味をいうとたいいていのは驚く。「対策」は「策^{さく}に^{たい}対^{たい}える」という意味である。紙の

なかった時代では、まず「簡」という細い竹の札に書いてこれを革ひもで綴じ合わせた。これを「策」といい、また「冊」ともいう（「冊」の字は簡を綴じ合わせた形を象ったものである）。漢代、人事採用の際に政治上の問題を天子の名のもとに策に書いた。これを「策問」といい、それに受験者が答えた文章を「対策」といったのである。似た言葉に「方策」があるが、「方」は木の板、「策」は竹の札をいい、紙のなかった時代の記録・文書をいう。

「分野」は、春秋時代、天の二十八宿（星座）に相応するように地上を分割した区分をいう。ある星に異常があると、それに相応する分野の国に異常がおこるという一種の占星術を分野説というのである。現在では領域という意味で通用している。これらの言葉の本来の意味は、国語辞典では書いてあるものもないものがある。

ついでながら、言葉の意味を調べる時、複数の辞書を引くくらべてみることを習慣づけたいものである。一般的に、一冊の辞書にのみ頼って、それが完璧であると思ひ込みがちになるからである。

上述のようにすでに変化した意味が固定化されてしまったものもあるのに対し、意味が変化する過程にあつて、次第に変化した意味が主流となりつつあるものもある。たとえば

「豹変」。『易经』草に「君子豹変、小人革面」（君子は豹変し、小人は面を革む）とある。これは、君子が過ちを改めて善に移るさまは豹の毛皮の模様のようにあざやかだが、小人、すなわち徳がなくつまらない人物は、過ちに気づくと顔つきを改めるだけだ、という意味である。ところが、現在では態度がころつと悪いほうに変わることに用いられることが多くなり、その場合、「君子豹変」は「君子も豹変す」と解釈される。本来は君子しか豹変できないものなのに、おかしなことになつている。

「呉越同舟」は『孫子』九地篇にある言葉で、仲の悪い者どうしでも同じ場所にて危難に遭つたら協力するという意味であつたが、後半部分が抜けて、仲の悪い者が同じ場所にいることという使い方をすることが多いようだ。

漢文に触れることが少なくなり、もとの意味に執着しない風潮が続くと、漢籍に由来する漢語の意味は変化していくであろう。しかし、変化することは言葉として生きていくことであつて、「豹変」が漢籍に埋もれたままであれば変化することもなかったのである。

日本語の歴史の中で、漢語が大量に取り入れられた時代が二つある。一つはいうまでもなく、漢字を知り、それによつて中国文化に接した時代。はじまりがいつからかは特定でき

ないが、遣唐使時代にまで至る間、膨大な数の漢語が日本人に吸収された。中には変化して日本語としての意味を持つものもあつたし、また「大根」から「大根」、「出張る」から「出張」ができたように日本製の漢語も早くから作られていた。

もう一つは明治時代。欧米語の訳語として多くの漢語が世に現れた。「哲学」などのように日本で新たに作られたものもあるし、漢籍の中に埋もれていたのが蘇ったものもある。欧米語の翻訳に試行錯誤を経て当てはめられたから、元の漢語の意味とは違っているものが多い。前述の例のような自然変化とは異なり、人為的な変化である。これを再生語と呼ぶこともあるようだ。どちらの時代も日本が海外の進んだ文化に触れて新しい概念を摂取した時代であり、その新知識は漢語によって日本人に吸収されたのである。

近代の再生語の例をいくつかあげてみよう。「経済」は「経世済民」あるいは「経世済俗」を短縮化した言葉で、本来は世を治め人民を救うという意味。「経世」は『莊子』齊物論篇が初出である。明治時代初期には政治学の意味で「経世学」が使われている。「経世済俗」は『抱朴子』に出ていて、略語の「経済」は唐宋時代から用いられている。もちろん、世を治める、すなわち政治という意味である。明治維新後、economyの訳語としては最初「理財」が使われたが、

やがて「経済」に取って代われ広まった。

「社会」は同じ村の住民の会合をいう。昔、二十五家を一社といった。南宋の朱熹（朱子）と呂祖謙の共編著『近思録』では、同じ集落の住民の組合を「社会」と呼んだ。これを近代日本ではsocietyの訳として用いた。「文化」は、武力を用いず文の力で民を教化することを意味し、漢代の書『説苑』に見られる言葉である。これがcultureの訳語として用いられ、人類社会が文明化していくこと、およびその過程で発展する学問や芸術の総称として使われるようになった。literatureの訳語「文学」は『論語』を典拠とするが、本来は学問の意味、novelの「小説」は『莊子』が初出であるが、つまらない小話という意味である。われわれが現在使っている漢語にはこの類が意外に多い。

現代日本では、新しい欧米語に対しては訳語を設けずに語音をカタカナで表記することが多くなってきた。カタカナ語ばかりだと文章が読みにくいし、何のことも見当もつかないことになる。カタカナ表記ができない中国語では、テレビが電視台、パソコンが電腦で、意味がわかりやすい。日本でも安易にカタカナに頼るのではなく、漢語による訳語を試みてはどうだろうか。新造語でもいいし再生語でもいい。もっと漢字の利点を生かしてみてもよいように思う。

これからの漢文指導——新「国語総合」古典教材の工夫

向 むこう

嶋 しま

成 しげ

美 よし

(筑波大学名誉教授)

一

高校生の漢文嫌いについてはもう随分以前から話に聞いてきたが、先日またシヨッキングなデータを目にした。国立教育政策研究所教育課程研究センターが平成一七年度に行った「教育課程状況調査(高等学校)」によれば、「国語総合」についての質問調査で「漢文は好きだ」という質問に対し、「そう思わない」と回答した生徒が五〇・三%、「どちらかといえどそう思わない」と回答した生徒が二〇・九%であったという。要するに「漢文は嫌いだ」と答えた生徒が実に七一・二%にも上ったというのである。もともと古文についてはもっとひどい状況で「古文が好きだ」という質問に対し「そう思わない」と「どちらかといえどそう思わない」の合計が七二・七%となっているから、漢文よりも一・五ポイント上回っている。しかしそれで漢文が古文よりましだなどと言ったりするのは、それこそ五十歩百歩、目糞鼻糞を笑うの類であって、高校生の漢文嫌いが由々しき事態であることに何ら変わりはない。

なぜ漢文がかくも高校生から嫌われているかについてはい

ろいろな理由が考えられる。難しい漢字ばかりが並んだ文章にまず嫌気が差したり、返り点や送り仮名に従って訓読することに煩わしさを感じたり、助字や再読文字などを覚えることにうんざりしたりすることが多分にあるのだろう。多くの高校生は恐らくは漢文の面白さに気付く前の段階でこうした障害にぶつかって漢文への興味、関心を抱くことができなくなり、そのまま漢文嫌いになっているのではなからうか。

平成二一年に公布された「高等学校新学習指導要領」では、こうした現状を踏まえてのことと思われるが、「国語総合」、「古典A」の教材として、「古典に関連する近代以降の文章を含めること」という規定が新たに加わった。翌平成二二年に出た「高等学校学習指導要領解説」によると、このことについて「これら(古典に関連する近代以降の文章)の中には、古典の魅力や現代的意義などを平易な言葉で記したものが数多くある。適切な分量でこれらを扱うことで、古典への興味・関心を広げることができることから、古典の教材として必ず含めることとしている」とある。この「古典への興味・関心を広げる」という記述からして「近代以降の文章を含む」という措置が古典嫌いの高校生を慮つてのものであつたらうこ

とは十分に想像できる。

では、このような「新学習指導要領」の指針に沿う漢文教育、とりわけ「国語総合」での漢文教育にはどのようなことが求められるのであろうか。次にはそのことについて少し詳しく思うところを述べてみたい。

二

漢文は今日、国語の中の一部として位置づけられている。かつて戦前には「国漢」の名で呼ばれていたように、漢文は国文と並ぶ独立した教科であった。いわゆる漢文訓読体の文章が実用性を持っていた時代にあつては、当時の社会がそれだけの漢文教育を必要としていたからにはほかならない。しかし時代が大きく変わった今日において戦前のような漢文教育の復活を望むのは意味のないことであつて、ほとんど論外のことになる。今日の高校生にふさわしい漢文教育となると、それはやはり国語の中での漢文ということになる。

そもそもなぜ漢文が国語の一部として必要なかといえ、漢文が古来日本人の言語文化の形成に欠くことのできない役割を果たしてきたという事実に基づいている。もともと中国の古典であつた漢文が、同時に日本人にとつても重要な古典であつたからこそ、日本の古文と並ぶ形で扱われてきたのである。そして漢文と日本人の言語文化との関わりは、これまではどちらかというところと奈良、平安朝を中心とする古代に目向けられがちであつた。しかし日本人が漢文から多くのもの

を学んだのは決して古代においてばかりではない。明治以降の近代においても日本人の言語文化、あるいは精神文化の面において漢文は抜きがたい実質を担っている。たとえば森鷗外にせよ、夏目漱石にせよ、日本近代文学史を飾る作家たちの文学が漢文をバックボーンとしていたことはすでによく知られているところであらうが、そうした作家に限らず多くの教養人たちが漢文に親しみすぐれた思索を重ねている。

大修館書店がこのたびの「新学習指導要領」の方針に従つて編集した「国語総合」にはそうした幅広い方々の「近代以降の文章」を収録した。中には中国文学の専門家の方の文章もあるが、そればかりではなくフランス文学者の桑原武夫氏の文章もある。桑原氏はフランス文学者でありながら、一方また大変な中国通の方で、私自身学生の時代に岩波新書の『新唐詩選統編』で杜甫の「衛八処士に贈る」詩の解説などを読んで強い感銘を受けたことがあつた。今回、大修館書店の「国語総合」が採っているのは筑摩書房〈中国詩文選〉に入っている同氏の『論語』の一文で、『論語』冒頭の章を取り上げての解説文である。これを読めば『論語』をどう読めばよいかがよく分かるし、『論語』の面白さもよく分かる。そうした意味では高校生の「古典への興味、関心を広げることができる」に十分に足るものといえるだろう。

「近代以降の文章」を導入するだけで漢文嫌いの高校生が一気になくなるとは思えないけれども、これが授業の場でうまく機能すれば有効に働くことは間違いないし、またそう

なってもらいたいと願っている。

三

「近代以降の文章」はあくまでも導入的な役割を担う補助的な教材であって、それだけで漢文の学習が事足りるわけではない。漢文の学習であるからには、当然のことながら漢文そのものに立ち向かうことになる。「国語総合」の漢文教材には、「故事成語」、「唐詩」、「史伝」、「思想」、「小説」などさまざまなジャンルの作品が並んでいるのだが、「故事成語」、「史伝」、「小説」などは叙事性が強く、「唐詩」は抒情性が強く、そして「思想」は論理性が強いという具合にそれぞれに持ち前を異にする。叙事性の強い作品ではやはりポイントを押さえた表現が重要であるし、抒情性の強い文学作品ではいかに詠むかという表現効果に注目したい。また論理性の強い思想作品は恐らくは漢文嫌いの高校生が最も敬遠しがちなものであるが、これなどは実は日本の古文ではまず期待することが難しい論理的思考を培うのによく適している。それから漢文全てに共通するものといえば、結局のところ優れた内容が優れた表現に支えられてことだろう。そしてそのことを掴み取るためには、丁寧にもものを読み、よく思索する姿勢を養うしかないのではないかと思う。

今日の情報化社会においてはインターネットなどを通じて溢れんばかりの情報が発信され続けているが、それらは概していうならば簡単にことを伝えるだけのものであって、たと

え電車の中であろうとも一読すればすぐに了解できるような安易な程度に留まっていよう。ところが漢文の場合は確かに難しいところがあって、一読してすらつと分かるようなものではない。机に向かつてじっくりと取り組まないことにはとても理解が及ばない。時間をかけて落ち着いてものを読み、思考力を高めることが、世の中が安易なものばかりに流れがちである今日こそ学校教育で強く求められてよい。

ここでもう一度桑原氏の文章を振り返ってみるならば、この文章は叙述に過不足がなく、実によく締まっている。高校生にぜひとも学んでもらいたい名文である。桑原氏の文章の基盤となっているのは、やはり氏が長く親しんでこられた漢文ではなかつたろうかと私はひそかに思っているのだが、どうだろうか。漢文を学ぶことは、単にその内容を理解するだけには留まらず、日本語の表現力を活性化するためにも役立つに違いないのである。

さて以上「新学習指導要領」による「近代以降の文章」を中心として「国語総合」における漢文教育について述べてきた。漢文が挙げている「古典に関連する近代以降の文章」は無論内容は漢文に関わりのあるものであるが、現代文の教材としても意味を持つ。今回の学習指導要領の改訂を契機として、漢文が国語の一部であることに今一度思いを致し、これまでも取り上げてきた古文との連携はもとよりのこと、新たに現代文との連携も視野に入れつつ進めていく必要があると強く感じている。

【授業実践案】古典指導の工夫——海知義「勉強」

江^え

川^{がわ}

順^{じゅん}

一^{いち}

(立命館慶祥中学校・高等学校)

一 本教材の意味

新学習指導要領においては、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。高等学校の学習指導要領解説では、「古典について解説した近代以降の文章(略)の中には、古典の魅力や現代的な意義などを平易な言葉で記したものが数多くある」とし、「古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある」(三八ページ)としている。

ここでは、海知義氏の「勉強」を扱い、このことを踏まえ、語彙を考えるとともに、漢和辞典に触れさせることにより、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを目的として授業試案を提案する。

二 指導略案

1 導入

「希望」と板書し、「希」について、漢和辞典を引かせる。その意味が①まれ。②かすか。③のぞむ。④こいねがう^①であることを示す。①②の意味は、③④の意味とは、一見異なるように思えるが、よく考えてみると、ほしいとのぞむ(③④)の

2 展開

- ・本文を読む。
- ・本文を説明し、内容を理解させる。
- ・ワークシートを配布(3に示す)。
- ・AとBの漢詩について、辞書を引かずに考えてみよう^①と指示。
- ・AとBを生徒に読ませる。
- ・全体の雰囲気をつかみ取らせる。
- ・ワークシート概要には注を示していないが、口頭により説明する上

A 送元二使安西

王维

渭城朝雨浥轻塵、
客舍青青柳色新。
勸君更盡一杯酒、
西出陽關無故人。

〔書き下し文〕(略)

〔口語訳〕

渭城の朝の雨は、街道の土ぼこりをしつとりと湿らせ、
この旅館のあたりの柳は青々と鮮やかな色を取り戻した。
さあ君よ、もう一杯ぐつと酒を飲み尽くしたまえ、
西に向かつて陽関を出てしまうと、もうこのように杯
を交わす はいないのだから。

で適宜必要と思われる注を入れて
もよい。

・両者に流れている共通の感情は何
かを問う。

・両者ともに送別詩であることに
気付かせる。前者は、作者王维が
友人である元二が安西に赴くこと、
後者は、作者李白が友人である孟
浩然が揚州に下ることについて、

B 黄鶴樓送孟浩然之広陵

李白

故人西辞黄鶴樓、
烟花三月下揚州。
孤帆遠影碧空盡、
唯見長江天際流。

〔書き下し文〕(略)

〔口語訳〕

の孟浩然是、西に向かつてこの黄鶴樓を出発し、
三月の霞が立ちこめる春景色の中を揚州(広陵)へと
長江を下って行く。
ただ一つ遠くに見える小舟の帆影は、いつともなく碧
の空に姿を消し、
あとはただ長江の水が天との境に向かつて流れて行く
ばかり。

惜別の思いを込めて詠っている点
に注目させる。

・両者に共通する空欄について、そ
の意味を類推させ、生徒とのやり
とりの中から答えを導き出す。

・漢和辞典を引かせ、「故人」につ
いて調べる。意味は次のとおり。
①古くからの友人。昔なじみ。②
もとの夫、また、妻。③死んだ人。

・中国語の「故人」には、①古くか
らの友人の意味しかないことを示
す。

・「故人」は、日中では意味が異な
ることを押さえさせる。中国語と
漢文においては、「古くからの友
人」の意味が共通することに注目
させ、教科書教材の一層の理解へ
とつなげる。

3 ワークシートの概要

AとBの七言絶句は、訓点を施し、ルビを振ったもの。書き下し文と口語訳（「故人」の部分のみ空欄）を示す。

本教材は漢文入門の単元であり、漢詩の単元は未習であることに十分配慮し、絶句のきまりなどについて細かな説明はしない。日本における俳句や短歌のように、漢文にも字数を揃える表現形式があると説明すればよい。

ワークシートについては、生徒が漢文に対して抵抗感が強いと判断できるなら訓点つきの漢文を提示せず、表題を含めて書き下し文と口語訳のみとするなど、生徒の状況によって提示方法を変える。

4 まとめ

作品A・Bは、ともに送別としてのパターンが明確であるので、生徒にとっては理解しやすいものである。

本活動により今後の授業展開に近づきたい。作品Aは単元「唐代の詩文」で扱うものなので、最後に教科書の掲載ページを実際に開いて見せてもよい。

三 古典指導の意識的な工夫

本教材の典である一海氏の『漢語の知識』は、漢文の授業を行う上で、さまざまな知見を与えてくれる。私自身も漢文教室の教壇に立つ時、中国（漢文）と日本との考え方の相異を述べる上で、氏の著作の整理に助けられることが多い。

学習指導要領の解説を俟つまでもなく、古典に対する興味・関心の喚起を図り、生徒が古典を楽しく読むための工夫の一つとして、私たち教師は、近代以降の文章を用いる取組について、各々の教室の状況にあわせて一層意識的に検討する必要がある。

一海知義

「勉強」



国総 313

『精選 国語総合』

勉強という日本語は、現在主として二つの意味で使われています。

- (1) 勉強してから遊びなさい。
- (2) 勉強しときますから買ってくださいよ。

辞書で勉強ということばをひきますと、

- (1) 学問に身を入れること。
- (2) 商品を安く売ること。

などと書いてあります。一つのことばが全くちがう二つの意味をもっているように見えますが、そういう場合、二つはその奥で一つにつながっているのがふつうです。

●特集Ⅱ新しい漢文授業のすすめ

【授業実践案】漢文学習の意義がわかる導入教材

——加藤徹「漢文のすすめ——未来を考えるヒント」

西^{にし}山^{やま}明^{あき}人^{ひと}

(東京農業大学第三高等学校)

事成語を使って表現

〔段落②〕例えば、こんな会話もそうだ。：

独特の味わいがある。(二九三・一〜15)

〔内容②〕「故事と今の自分の生活をリンク

ク・人間の変わらぬ本質をつく

〔段落③〕漢文にはあらゆる…そのまま輸入したものだ。(二九四・1〜11)

〔内容③〕漢文を読み、豊かな文化を生み出した

〔段落④〕二十一世紀の今日、…何よりも重要なのである。(二九四・12〜終わり)

〔内容④〕現在や未来を考えるヒント

授業では、現代文の学習を活用し、まず、段落ごとの内容(キーワード)を指摘させる発問課題を用意し、文章の内容をとらえさせる。

はじめに

高校生の多くは、漢文が日常生活から離れたものという認識を持ちがちである。入門期に設定される漢文訓読法の学習は無味乾燥に陥りやすい。そこで、本教材のような、漢文学習の意義がわかる導入教材が有効になる。

一 教材の内容と美点

漢文が今の生活にリンクする、という筆者の見解が、わかりやすい具体例で記述されている。事例でとりあげた「塞翁が馬」に含まれる人間の本质が、今の自分を見つめ直し、未来を考える契機になり得ると述べ

ている。また、漢文をもとに日本人が文化を創造したとも述べている。このように、漢文学習の意義がわかりやすい言葉で説明されているので、漢文への導入教材として、この点を読むとよい。

二 授業展開(例)

教材文の文章構成を次の通りとした。文章を①〜④の四つの意味段落に分け、文頭と文末を示した。また、意味段落①〜④の内容を代表する語句(キーワード)にあたる語句を、内容①〜④に示した。

〔段落①〕インターネットの…一種のリンク行為と言える。(始め〜二九二・10)

〔内容①〕漢文の面白さ・リンク感覚・故

次に、本文の主題をふまえた課題を用意し、主題についてまとめさせる。たとえば、けがをした人の話は「塞翁が馬」の話とどうリンクするか、けがをした人は、今の自分をどう考えるか、などである。

これらの課題の答えは、生徒にまづノートに記述させて、それから黒板に出て書かせる。教師が、答えのキーワードに線を引き、採点してやる。他の生徒は、板書の添削を見て、自己採点する。記述練習の学習が個別指導になりがちで、時間と手間がかかってしまいがちであったが、この方式だと、教室で一斉指導ができる。

最初の課題の場合には、**「解答例」**「息子」がけがをしたことと、骨折をしたこと。

傍線部がキーワードで、これで正解とするなどである。

また、本文全体を要約させてもよいだろう。要約文の課題は、評価は難しいとされるが、先の文章構成の

「内容」でとりあげたキーワードが入っていればよいとする。あらかじめ、キーワードを指定して、使用語句として条件にしてもよい。

「要約例」「私たち日本人は、漢文を読むことによって、日本の文化を生み出すことができた。漢文の内容には人間の本質が含まれているから、私たちは、漢文を読んで、高い見地から今の自分を見つめ直し、未来について考えることができ、結果として文化を生み出せる。しかも、様々なジャンルを持つ漢文は、日本人にとって学問・文芸の源泉となった。現代社会の課題も、古人が体験ずみのものであり、漢文の中にある。私たちは、歴史・宇宙など大きな時空の中に自分を位置づけて、現在や未来を考えるヒントを漢文から得て、確かな判断力を養うことができる。」

三 漢文学習への手がかり

簡潔に漢文学習の意義を述べたこ

のような文章を読むことにより、生徒が、漢文の存在を自分の生活に位置づけることができる。漢文学習への動機づけがなされることになる。

これまで、漢文学習の導入時期には、漢文学習の意義を「教師が語る」ことが多かったためか、説教口調にならざるをえない。教師には、説教するつもりはなくても、生徒がそう感じるという意味である。

ところが、本教材を読むことにより、生徒自身が本文解釈の過程で、自己の経験と漢文世界とを自分の手で「リンク」させるから、漢文学習の意義を認識し動機づけがなされる。その後の、訓読の学習が、自己目的化しなくなる。あくまでもゴールは漢文読解であり、訓読の学習に対して、読解ツールを手に入れるという目的が持てるからである。

また、漢文の読解学習においても、格言・故事成語の主題と自分の今の生活をリンクさせる視点を持って読

解するので、主題にアプローチする姿勢をもつて学習を進められるだろう。

たしかに、一教材をはきむことによる授業時間のやりくりは必要だ。だが、その効果が今後の漢文の授業に十分反映される。教師にとって結果的に授業効率を上げ、生徒にとっては学習効率上がる。

四 授業後の課題（学習の広がり）

本教材は、漢文学習への入門（特に動機づけ）の学習だけでなく次のような学習へ広げることができる。

一つは、漢文の故事成語を調べる学習である。授業で本教材を扱った後、事例（「塞翁が馬」）以外にも、自分の今の生活とリンクする故事成語を、国語便覧などで調べさせ、事例をまねて、故事成語を使った対話を作らせる課題が考えられる。

故事成語の意味を理解した上で、自分の生活を見つめ直すこともでき、漢文学習の意義を体感させる学習へ

とつながる。こうして獲得された故事成語は、人間や社会を見る視点を与え、生涯にわたって生徒の生活に活かされることになる。

また、漢文や故事成語の主題にあてはまる事例・経験を収集する課題は、小論文の学習にもなる。近年、大学受験で課せられる小論文のねらいは、大学進学後にゼミや卒論で機能する論理的思考力をみることである。漢文の導入教材を使って、今後の小論文指導にも発展する、思考力養成のための基礎課題である。

終わりに

これまでは、漢文学習の入門期には、直接、訓読のきまり学習に入った。そのため、学習が自己目的化しがちで、漢文の内容に入るまでに生徒が疲労感を感じてしまった。今後は、漢文の本質に気付かせられる、本教材のようなすぐれた文章をはきみ、漢文学習に入るべきであろう。

加藤 徹

「漢文のすすめ 未来を考える ヒント」



国総 314

「新編 国語総合」

インターネットのウェブ・ページでは、ある語句をクリックすると、瞬時に関連する他のページへ飛ぶことができるが、私は、漢文の面白さの一つは、このリンク感覚にあると思っている。

漢詩を詠んだり、漢文を書くとき、作者は素直に自分の言葉で目の前の状況を書いてもよいのだが、歴史的な挿話や故事をふまえて、含蓄に富んだ表現をすることが多い。この発想が、ウェブ・ページのリンクとよく似ているのだ。

私たちが、漢詩や漢文を書かないまでも、目の前の出来事を故事成語を使って表現することは、一種のリンク行為と言える。……

【授業実践案】家電と言えば何色?——一海知義「桃いろいろ」

安^あ 立^{たち} 典^{のり} 世^よ
(浜松南高等学校)

一 漢文を扱う前に

——国と時代のハードル

一海知義「桃いろいろ」を読んで、ふとこんな話を思い出した。電化製品の話である。日本で家電製品といえば白家電と呼ばれるほど白が定番だが、中国では赤家電が中心で、冷蔵庫も洗濯機もエアコンも赤が主力の色なのだそう。さぞかし室内が落ち着かないことと思うが、色の好みは国によって様々、日本人の常識だけでもものを見るのが、いかに偏っているかを実感するエピソードである。

さて、冒頭から話題がそれたが、筆者が漢文を授業で扱うとき、いつもこれが核心と肝に念じていること

が二つある。句形や難語句はさておき、まず第一に大切なのは、漢文が古代人の書いた文章であるということ、もう一つは漢文が外国の文章であるということだ。実は、生徒たちにとって難しいのは句形ではない。最も理解しがたいのは古代中国人の独特のものの見方、考え方なのである。時代が古い上に、外国人の思考に寄り添わなくてはいけない……このところのハードルが思いの外高いのである。

中国人と日本人の感性は全く違う……まずは、違うということを実感するために、日本人の桜、中国人の桃に着眼したこの教材は、中国文学へのよい導入になるといえよう。

二 授業の展開

この教材を扱うにあたっては、まずは、本文に書かれている中国人と桃の関わりをまとめさせたい。杜甫や王維の詩からは、桃の花の鮮やかさが人々を引きつけていたことが伝わる。『詩経』の例からは、桃が花嫁の美しさや一族の繁栄につながるものが読み取れる。『史記』の言葉からは、誠実さのたとえ(理想的な人間の在り方)、李白の文からは、人間界を離れた別天地(仙界)のイメージが湧き立ってこよう。また、陶淵明の描く桃源郷では、老荘思想を踏まえたユートピアの入り口を桃の花が飾り立てている。

桃の喚起するイメージは様々ではあるが、強く言えることは、桃が中国人にとって、理想的なもの、おめでたいもの、すばらしいものとして、憧れをあつめ、とても親しまれていたものだということだ。ある意味、人間世界を離れた別天地の夢に人々を誘うものとして、うっとりとした気持ちを起こさせる花であったとも言えるだろう。これは桃の花の華やかさもさることながら、桃がつけるかくわしい実のイメージも重なってきているに違いない。

中国人と桃との関わり、桃の持つイメージを押さえられたら、次は発展として、日本人の花をめぐる感覚について考えさせたい。

桃の華やかさに対する憧れは、万葉人にも影響を与えていたようで、大伴家持による「春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ（春の庭は紅に美しく輝いている。桃の花が照り映える道に立つおとめよ）」と

いう歌が有名だ（もちろん中国由来の植物といえば、奈良時代は圧倒的に梅の花ではあるのだけれど）。桃の花の鮮やかな紅色と乙女のみずみずしい美しさが互いに強め合う、これもまた読む者をうっとりさせせる歌だ。しかしながら、こうして輸入された中国の感覚がずっと日本に根付いたかというところでなかつた。遣唐使が廃止され、国風化が進むと、日本人の花の好みは急速に桜へと傾いていく。そして、日本人の心の中を深く占めるに至った桜にどんな思いが反映されているかと言えば、中国人の桃のように、おめでたいという気持ちばかりではあり得なかつた。むしろ、せつないようなやるせないような、ひどく複雑に屈折した思いがこめられていると言えるのではないか。

芭蕉に「さまざまなこと思い出す桜かな」という句がある。日本人と桜の関わりを押さえる時には、この

句を投げかけてもいいかもしれない。生徒の心の中にある桜は何であろうか。卒業式や入学式に漂うおめでたいムードの裏側には、別れの寂しさや新生活への不安感が寄り添っている。誰もが桜に様々な思いを重ねて見ていることだろう。歌謡曲にも桜をテーマにしたものが数多い。桜は現代日本人に対して、物思いをさせる花なのだ。そして、その物思いの中には、時は流れて、二度と戻ることはない、といった無常観も存在していよう。無常観といえば、こんな歌を紹介してもいい。「散ればこそいとど桜はめでたけれ浮き世になにか久しかるべき（散るからこそいつそう桜はすばらしい。この浮き世に何が永遠であろうか）」（『伊勢物語』）

三 まとめ——古典を読む姿勢

このように中国人と日本人の好みは花一つとっても全く違っている。

その理由を考えさせるのも面白からう。おそらくは風土の違い、抱えてきた歴史の違いというものが、それぞれの国民の精神性の骨身に達するほど深い影を落としているということが実感できるはずだ。

もちろん、私たちは日本人である。だから、中国人の愛する桃を中国人のように理解できない。桜よりも赤くてぼつりした花を咲かせる桃をみて、どうしてもくだい、重たいと思ってしまう。しかし、きっと中国人は桜を色がうすくてつまらないと思っているに違いない。感性の違い、感覚の違いを乗り越えて古典を読むことは容易ではない。しかし、まずは違うのだという気持ちで読むことの大切さを強調しておきたいものだ。

また、我々現代日本人がイメージする桃の花は、雛祭りに飾られるピンクの花だが、調べてみると桃の花も白っぽいものから鮮紅まで多種多

様である。花を鑑賞する「ハナモモ」の一種や、中国原産の「赤花蟠桃」という桃も非常に赤い花をつけるといふ。杜甫が「欲^ズレ^ズ然^ト」と表現し、家持が「紅にほふ」とうたった桃の種類がどのようなものだったか、こちらも古代人の感覚をつかむために、今後調べていきたい点である。

文学作品を読む上では、その時代、その国の社会背景、文化的土壌を理解していないと、本当の感動は生まれない。一つ一つの単語によって、喚起されるイメージがある。古代の作者たちは、そういうイメージに依拠して作品を作り上げている。作品を読み取る我々は、ひとしずくでも多く、そのイメージをくみ取ろうとする姿勢が大切なのだ。

*

Q 「家電といえば何色？」

A 「時代も国も変われば様々。……こういう答えが、この教材を読み終わったときに返ってくるだろう

か。日本人は白が好き。中国人は赤が好き。そしてそれは、もしかしたら、桜と桃の好みの違いにつながるとても伝統的で奥深い問題なのかもしれない。

一海知義

「桃いろいろ」



国総 312

『国語総合 古典編』

日本で「花」とだけいえば、ウメの花をさした時代があったようですが、今はサクラの花をさすのがふつうです。中国ではどうでしょうか。

宋代の詩人歐陽脩の「洛陽牡丹記」という文章に、つぎのような一節があります。

洛陽の人、……花を某の花、某の花、と曰ふ。牡丹に至りては、則ち名づけず。直だ花とのみ曰ふ。

これを読んで、花とだけいえば中国人は牡丹をさすのだな、と早合点してはいけません。……

平成
25
年度

新課程用「国語総合」のご案内

国語総合

現代文編
古典編

A5判
280ページ
207ページ
4単位用

新刊



[国総 311・国総 312]

質量共に充実！
評論教材中心の完全ジャンル別分冊版

内容特色

- 大好評の完全ジャンル別構成
- 入試を見据えた評論ラインナップ
- 小説は名作主義！
- 珠玉の短編がこの1冊に
- 古典をテーマにした文章を収録

精選 国語総合

A5判
388ページ
4単位用

新刊



[国総 313]

しっかりと手応えのある教材を
バランスよく収録

内容特色

- 安心して使える、国語総合の決定版！
- 充実した評論教材
- 近現代の名作を精選
- 古典をテーマにした文章を収録

新編 国語総合

A5判
389ページ
4単位用

新刊



[国総 314]

新しい時代に対応！
実社会で活きる豊かな言葉の力をはぐくむ

内容特色

- 新鮮で親しみやすい教材を
テーマ別単元で構成
- 現代的な視点を提示する随想・評論
- 読書の楽しみを広げる小説教材
- 古典は面白い！と思わせる工夫満載
- 学習意欲を高めるカラー写真、
イラスト多数収録

「古典に関連する近代以降の文章」主な収録教材一覧

教材名	著者	国語総合 古典編 [国総312]	精選 国語総合 [国総313]	新編 国語総合 [国総314]
古典の魅力	野村萬斎		○	○
なんてステキな光景なの！ —春はあけぼの	山口仲美			○
壇の浦の戦い —『平家物語』を読む	永積安明			○
百人一首	大岡 信 (現代語訳詩)			○
「和歌」という言葉の意味	大岡 信	○	○	
漢文のすすめ —未来を考えるヒント	加藤 徹			○
春眠暁を覚えず	一海知義			○
勉強	一海知義		○	
桃いろいろ	一海知義	○		
論語 学而第一	桑原武夫	○	○	○

●多彩な著者による随想や解説、現代語訳などを収録しました。原文とあわせて読むことで、いまに生きる古典の魅力を実感することができます。



[国総314]



[国総313]



[国総312]

- 古典をより身近に感じてもらうためのコラムを多数収録しました。
- 『新編国語総合』の漢文編では、故事成語や漢詩の単元に、北原白秋、井伏鱒二、土岐善麿、会津八一、佐藤春夫らの訳詩を収録しました。

〈鴻門の会〉にみる『史記』の文体的特徴（上）

——『漢書』との比較から

坂さか 口ぐち 三み 樹き

（聖徳大学短期大学部）

はじめに

「左国史漢」の称もあるように、前漢・司馬遷の『史記』と後漢・班固の『漢書』は、中国古代の代表的な歴史書である。しかし、『史記』が通史であるのに対し、『漢書』は断代史であるなど、両書はいろいろな面で異なった性格を持っている。それゆえに古くから比較論がおこなわれてきた経緯があり、近年では大木康『『史記』と『漢書』—中国文化のパロメーター』（書物誕生—新しい古典入門）・岩波書店、二〇〇八）が、後世における評価や継承のあり方を中心に比較をおこなっている。

拙稿では、それら先学の驥尾に付しつつ、問題を特に文体の面に絞って考察を加えてみたい。というのも、前述の大木氏の著書でもこの問題を取り上げ、「大づかみにいうならば、『史記』は古文的であり、『漢書』は駢文的なのである。」

（三五頁）と結論づけているのであるが、『史記』と『漢書』の文体の相違にはそれだけでは説明しきれない側面があるようにも思われるからである。そこで、『史記』項羽本紀と『漢書』における〈鴻門の会〉の記述を仔細に比較・検討することで、『史記』と『漢書』の文体的特徴がいかなるものであるかを明らかにし、さらにそこから『史記』の文体の由つて来たるところがいずこに存するかを窺うこととする。

一

〈鴻門の会〉は、沛公（劉邦）が項羽のいる鴻門に赴いて謝罪する場面から始まる。『史記』項羽本紀と『漢書』高帝紀では、その場面の記述にいくつかの興味深い相違が認められる（本文対照表「一 沛公謝罪の場面」参照）。全体的に、『漢書』の記述が『史記』に比して簡略になっていることは容易に気づかれるが、ここでは特に、次の二点に注目したい。

まず一点目は、沛公が謝罪のために鴻門までやってきたことを述べた部分である。『史記』では「來見三項王、至三鴻門」(来たりて項王に見えんとし、鴻門に至り)と七字で記述されているが、『漢書』ではそれが「見三羽鴻門」(羽に鴻門に見え)と四字に圧縮されている。確かに、「誰が何をしたか」という出来事の帰結のみを記述するのであれば、ここは「沛公が(謝罪のために)項羽と鴻門で面会した」ということであるから、『漢書』の記述はよく整理された無駄のない表現といえるであろう。それに比べれば、『史記』の叙述は「來」「見」「至」と動詞が三つも連ねられていて、一見冗漫なようにも見受けられる。しかし、その三つの動詞の重なりが、謝罪のため面会しようとして、わざわざ鴻門まで足を運んだ沛公の動きそのものを、読者に印象づける働きをしているといえよう。

二点目は、沛公の謝罪の言である。『史記』の「得三復見三將軍於此」(復た將軍に此に見ゆることを得んとは)の部分には、『漢書』では「與三將軍三復相見」(將軍と復た相見えんとは)となっていて、構文はやや異なるものの、『史記』にある「此」がないことを除いてさほど大きな違いはないように見える。しかし、この「此」の一字の有無は、意外に大きな相違なのではあるまいか。というのも、「此」の一字があることによって、二人が相対している場が意識された発話と

なり、その時その場所における当事者の発話としてのリアリティを獲得することになるからである。とすれば、「此」の一字を欠いた『漢書』の発話描写は、たとえ意味内容は『史記』とほぼ同じであっても、そのような臨場性には乏しいといわざるを得ない。

二

では、続く酒宴の場面はどうであろうか(本文対照表「一酒宴の場面」参照)。両書におけるこの場面の記述を比較してすぐに気づくのは、『史記』では細かく記されていた座位についての記述が、『漢書』ではすべて省略されているということである。誰がどこに座ったかを説明したこの単調ともいえる記述は、出来事の大筋を追う上では省略しても支障はない。しかし、この場面においては、実はきわめて重要な意味を持つ。すでに吉原英夫氏の指摘にあるように、このような同一平面上では東向きが尊位であった。項羽は、客人である沛公を差し置いて自ら上座に座ることで、自己の優位を誇示して見せたのであつたらう。つまり、沛公は自分よりも十五歳も年少の項羽の下風に立たされたわけである。『史記』の座位の記述は、この場における両者の力関係を如実に示しているものであり、読者はそこから緊張に満ちた酒宴の場の雰囲気を読み取ることができるのである。

次に、項羽の謀臣范増についての記述に目を移せば、項羽に沛公暗殺の決断を迫る場面と、項荘に沛公暗殺を指示する場面の記述が注意をひく。

まず、前者について見れば、『漢書』では「數目_レ羽擊_三沛公_一。(數_レ羽に目して沛公を撃たしめんとす。)」と簡単に説明されている部分だが、『史記』では「數目_三項王_一、擊_三所_レ佩玉_一、以示_レ之_者三。(數_レ項王に目し、佩ぶる所の玉_三玦_一を挙げて、以て之に示す者_三たびす。)」と、目配せしつとつた范増のしぐさまでが具体的に書き込まれている。また、後者の項荘に沛公暗殺を命じる場面でも、『漢書』の范増の発話が「汝入_レ以_レ劍舞、因擊_三沛公_一殺_レ之。(汝入りて劍を以て舞ひ、因りて沛公を撃ちて之を殺せ。)」の十一字であるのに対し、『史記』では「若入_前爲_レ壽。壽畢、請_三以_レ劍舞_一、因擊_三沛公於坐_一殺_レ之。(若入り前みて寿を為せ。寿畢はらば、劍を以て舞はんことを請ひ、因りて沛公を坐に撃ちて之を殺せ。)」と、十九字にわたってより詳細に写される。これは、『漢書』が『史記』の記述を簡略化して整理したために生じた相違と考えられるが、しかし、こうして両者を並べて比較したとき、『史記』の描く范増像の方が、《鴻門の会》のキーパーソンとしてはるかに生彩を放っていることは明らかである。項羽に玉玦を挙げて決断を迫る姿や、項荘に嚙んで含めるように暗殺の手順を指示する范増の言葉からは、執拗に沛公暗殺を画策する范増

の老獪さがくつきりと浮かび上がる。『史記』の文体が、単に出来事の帰結を記述するだけでなく、場面を生き生きと再現させる力を備えていることの好個の例といえるであろう。

また、それとの関連でいえば、項羽の反応についての記述も興味深い。『漢書』がただ「不_レ應(応ぜず)」と記すのみなのに対し、『史記』は「默然不_レ應(默然として応ぜず)」と、「默然」の語を添えてその押し黙った様子のことさらに描き出す。この「默然」からは、すでに沛公を殺す気持ちが失せてしまい、范増の意図に気づきながらもそれを黙殺する項羽の心の動きが伝わってくる。

さらに、『史記』では、項荘の劍舞の申し出に対し、項羽の「諾」という返事が記され、会話によって場面が進行していく。范増の言いつけどおりの項荘の口上に対し、その意図を知ってか知らずか、「よかろう」と鷹揚に許可する項羽の一語があることで、緊張感をほらんだその場面が立体的に浮かび上がる。

かかる特徴を備えた『史記』の文体に対し、では『漢書』の文体にはどのような特徴が認められるであろうか。右の比較を通して浮かび上がるのは、煩瑣な部分を極力排して獲得された『漢書』の文体の簡潔な記録性である。例えば、范増による沛公の暗殺指示の場面について見れば、『史記』では「若入_前爲_レ壽。壽畢、請_三以_レ劍舞_一、…莊則入_爲壽。壽畢

曰、「…」のように、会話と地の文にわたって同じ表現が繰り返され、いささか煩わしい印象がある。また、項莊と項伯の劍舞の記述でも、「項莊拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞、…」と、近接した部分に同一表現の反復が見られる。ところが、その部分に対応する『漢書』の記述では「汝入以劍舞、…莊入爲壽。壽畢曰、…」因拔劍舞。項伯亦起舞、…」のごとく同一表現の重複は最小限に抑えられ、「誰がどうか」がきわめて簡潔に提示されることになる。『漢書』の文体の特徴は、このように表現を整えることで得られる簡潔な記録性にあつたといえよう。⁽⁶⁾

さて、〈鴻門の会〉における沛公の危機はなお続いているが、事態は沛公の護衛役である樊噲の闖入によって新たな局面を迎える。次はその部分を取り上げて検討することとする。

(以下、次号)

注(1)『史記』と『漢書』の比較論のあらましは、狩野直喜『両漢学術考』(筑摩書房、一九四三)の「三十一 史記と漢書」(上)・「三十二 史記と漢書」(下)によって概観できる。また、專著としては朴宰雨『史記』《漢書》比較研究』(中国文学出版社、一九四三)がある。なお、この文献については、京都教育大学の谷口匠氏より御教示を得た。記して謝意を表する。

(2) 第二章『史記』と『漢書』のちがいの三〇〜三五頁。

(3) ちなみに、『史記』高祖本紀ではこの部分を「驅之鴻門、見謝項羽。(驅りて鴻門に之き、見て項羽に謝す。)」のように、やはり動詞を重ねて記述している。

(4) 吉原英夫「中国古代の座位」『漢文教室』第二四号、一九四

(5) 〈鴻門の会〉が行われたのは紀元前二〇六年である。項羽の生年は前二三二年で、この時二十七歳。一方、沛公の生年は前二四七年(一説に、前二五六年)で、この時四十二歳であつた。

(6) 吉川幸次郎『漢文の話』(ちくま文庫、一九六六)には、『漢書』について「その文章についていえば、『史記』よりも、より少く放胆である。それだけに、より謹厳に整頓している。……『史記』は名文であり、『漢書』は能文である。叙事の手法としては、『漢書』の方が、安全であるとする見方も多い。」(下篇「第四 歴史書の文章・2 史記以後の『正史』の文章」という。

『史記』項羽本紀

沛公旦日從百餘騎來見項王。至鴻門。謝曰。臣與將軍戮力攻秦。將軍戰河北。臣戰河南。然不自意能先入關破秦。得復見將軍於此。今者有小人之言。令將軍與臣有郤。項王曰。此沛公左司馬曹無傷言之。不。然。籍。何。以。至。此。』

沛公旦日百餘騎を従へ、來たりて項王に見えんとし、鴻門に至り、謝して曰はく、「臣將軍と力を勤めて秦を攻む。將軍は河北に戦ひ、臣は河南に戦ふ。然れども自ら意はざりき、能く先づ関に入りて秦を破り、復た將軍に此に見ゆることを得んとは。今者、小人の言有り、將軍をして臣と郤有らしむ。」と。項王曰はく、「此れ沛公の左司馬曹無傷之を言ふ。然らずんば、籍何を以て此に至らん。」と。

『漢書』高帝紀

沛公旦日從百餘騎見羽。鴻門。謝曰。臣與將軍戮力攻秦。將軍戰河北。臣戰河南。不自意先入關破秦。與將軍復相見。今者有小人之言。令將軍與臣有隙。羽曰。此沛公左司馬曹無傷言之。不。然。籍。何。以。至。此。』

沛公旦日百餘騎を従へて羽に鴻門に見え、謝して曰はく、「臣將軍と力を勤めて秦を攻む。將軍は河北に戦ひ、臣は河南に戦ふ。自ら意はざりき、先づ関に入りて、能く秦を破り、將軍と復た相見えんとは。今者、小人の言有り、將軍をして臣と隙有らしむ。」と。羽曰はく、「此れ沛公の左司馬曹無傷之を言ふ。然らずんば、籍何を以て此に至らん。」と。

二、酒宴の場面

項王即日因留沛公與飲。項王、項伯東嚮坐。亞父南嚮坐。亞父者、范增也。沛公北嚮坐。張良西嚮坐。范增數目項王。舉所佩玉玦以示之者三。項王默然不應。范增起。出。謂曰。君王為人不忍。若入前為壽。舉請以劍舞。因擊沛公於坐。殺之不者。若屬皆且為所虜。莊則入為壽。壽畢曰。軍中無以爲樂。請以劍舞。項王曰。諾。項莊拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞。常以身翼蔽沛公。莊不得擊。

項王即日因りて沛公を留めて与に飲す。項王・項伯東嚮して坐し、亞父南嚮して坐す。亞父とは、范増なり。沛公北嚮して坐し、張良西嚮して待す。范増數目項王に目し、佩ぶる所の玉玦を挙げて、以て之に示す者三たびす。項王黙然として応ぜず。范増起ち、出でて項莊を召し、謂ひて曰はく、「君王人と為り忍びず。若入り前みて寿を為せ。寿畢はらば、劍を以て舞はんことを請ひ、因りて沛公を坐に撃ちて之を殺せ。不者ずんば、若が属皆且に虜とする所と為らんとす。」と。莊則ち入りて寿を為す。寿畢はりて曰はく、「君王沛公と飲す。軍中以て樂しみを為すこと無し。請ふ劍を以て舞はん。」と。項王曰はく、「諾。」項莊劍を抜き起ちて舞ふ。項伯も亦た劍を抜き起ちて舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽す。莊撃つことを得ず。

羽因りて沛公を留めて飲す。范増數目羽。擊沛公。羽不應。范増起、出、謂項莊曰。君王為人不忍。汝入以劍舞。因擊沛公。殺之不者。汝屬且為所虜。莊入為壽。壽畢曰。軍中無以爲樂。請以劍舞。因拔劍舞。項伯亦起舞。常以身翼蔽沛公。

羽因りて沛公を留めて飲す。范増數目にして沛公を撃たしめんとするも、羽応ぜず。范増起ち、出でて項莊に謂ひて曰はく、「君王人と為り忍びず。汝入りて劍を以て舞ひ、因りて沛公を撃ちて之を殺せ。不者ずんば、汝が属且に虜とする所と為らんとす。」と。莊入りて寿を為す。寿畢はりて曰はく、「軍中以て樂しみを為すこと無し。請ふ劍を以て舞はん。」と。因りて劍を抜き舞ふ。項伯も亦た起ちて舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽す。

二〇一二年度センター試験の漢文について

諏訪原研
(河合塾)

概要

今年のセンター試験の漢文は、宋代の文人孫宗鑑そんそうかんの隨筆『西畚瑣録』からの出題で、同じ宋代の文人政治家蘇東坡そとうはのユーモラスな逸話を記したものでした。

リード文に、当時の蘇東坡の置かれていた状況と逸話の場面の説明があるので、内容は捉え易いはずなのですが、例年堅苦しい論理的な文章が出題されているので、漢文とはそういうものだと思いついて受検生にとっては、本文の軽妙洒脱な最後のオチがわからず、主旨の把握に苦慮したのではないでしょう。

本文の総字数は二二五字で、昨年より七字、一昨年より四四字増えました。昨年初めて二〇〇字を超えましたが、今後も二〇〇字以上の文章が出題されてくるものと思われまます。設問数は例年より一問増えて、センター試験が始まって以来初めて七問になりました。今後、この七問という設問数が定着するかどうか、その動向が注目されます。

設問では、問1の語意問題は二〇〇九年度から四年連続、問4の文中の空欄補充問題も二年連続の出題です。解釈、書き下し文、理由説明、本文の主旨説明等の問題も例年通りの出題で、これといった新傾向の設問はありませんでした。

問7の主旨と表現に関する問題を除けば、全体として紛らわしい選択肢はほとんどなく、文脈を素直にたどっていけば自然と正解が得られる良問でした。難易度としては、昨年に比べて「やや易」といったところでしょう。

設問の解説

【問1】傍線部(1)「未幾」・(2)「交」の意味の問題。

「未幾」(読みは「いまだいくばくならず」、意味は「まもなく」)は頻出語句なので正答してほしいところですが、河合塾の受験生追跡調査のデータでは、正答率は56%でした。「交」(読みは「こもこも」、意味は「かわるがわる」)は馴染みのない語だったせい、正答率は48%と、半分にもとどいていません。誤答として「立て続けに」を選んだ受験生が多

【問題文】

東坡元豊間、繫御史獄、誦黃州元祐初、起知登州、未幾、以礼部員外郎召道中、偶遇、二當時獄官、甚有愧色。東坡戲之曰、有蛇螫殺人、為冥官所追議、法当死。蛇前訴曰、誠有罪、然亦有功、可以自贖。冥官曰、何功也。蛇曰、某有黃、可治活、所活已數人矣。吏考驗、固不誣、遂良久、牽一牛至獄、吏曰、此牛觸殺人、亦当死。牛曰、我亦有黃、可以治病、亦活數人矣。良久亦曰、久之、獄吏引一人至、曰、此人生常殺人、幸免死。今当還命、其人倉皇、妄言、亦有黃。冥官大怒、詰之曰、蛇黃、牛黃、皆入葉、天下所共知、汝為人、何黃之有。左右交訊、其人窘甚、曰、某別無黃、但有此慚惶。」

(孫宗鑑『西畚瑣録』による)

かったようですが、これは、「交」の本来の意味を考慮せず、文脈だけに頼った結果でしょう。

【問2】傍線部Aの返り点の付け方と書き下し文の問題。

五つの選択肢ともすべて返り点の付け方と書き下し文は正しく対応しているので、書き下し文の正誤を判断すればおのずと正解できます。白文で、しかも長めの文なので、少々取っ付きにくいですが、「為―所―」が「―の―する所と為る」と読む受身の構文であることに気づけば簡単に解けます。正答率は69%と、ほぼ七割近い出来でした。

【問3】傍線部Bの解釈問題。

問題文にはすでに訓点が付いていますが、これは読みがわかった上での高度な解釈力を見ようとするもので、一昨年から続いている出題形式です。本問では「誠―、然―」(たしかに―ではあるが、しかし―)の構文や、「功」(功績)、「可―」(〜できる)、「自贖」(自分自身で罪を償う)等の解釈が決め手になります。正答率は85%で、漢文の全問中、最もよく出来ていました。

【問4】空欄補充と理由説明問題。

(i)の空欄補充の問題では、死刑を求刑された蛇と牛の言い分が裁判官に認められ、人間の言い分は退けられたことから、空欄[X]には蛇と牛が死罪を免れたことを意味する「得レ免」が入ります。(ii)の判決理由の説明問題では、無罪を主張して

いる④と⑤を比較検討します。⑤の「人を殺してきたというのは誤解で」の部分は本文に照らして誤りですから、正解は④になります。正答率は(i)が75%、(ii)が67%でした。

【問5】傍線部Cの理由説明問題。

冥界の役人が怒った理由は、傍線部の直前の一文、及び直後の役人の言葉から、その人がいい加減なことを言っただけの罪を免れようとしたことにあるとわかります。正答率は実に80%で、全問中、二番目によく出来ていました。

【問6】傍線部Dの書き下し文の問題。

傍線部は前後二文から成り、後の文が「何^ノ—^カレ^ラ有^{ラン}」という反語特有の形であることに着目すれば簡単に解けます。句形の知識が威力を発揮する好例と言えますが、正答率は40%と、全問中最低でした。これは基本句形の習得がいかになおざりになっているかの証左にほかなりません。誤答としては②の「何ぞ黄の之れ有らん」が28%ありました。なお、正解の前文「汝は人^ガ為^リ」の「為^リ」は助動詞の用法なので、本来なら平仮名で記すべきでしょうが、他の選択肢との兼ね合いで漢字表記されているものと思われまます。

【問7】本文の主旨と表現上の特色に関する問題。

文末の悪人の発言中にある「慚惶」の「惶」が、同音の「黄」に引っかけた駄洒落であることに気づくかどうかが鍵です。気づかなかった人は、本文の特色であるアイロニーや

ユーモアがまったく理解できていないことになります。正答率は63%ですから、まずまずの出来と言つてよいでしょう。

明暗を分けた問題

正答率が半分にとどかなかつたのは、問1の「交」の意味と、問6の反語の読みの問題の二つで、いずれも漢文の基礎知識に関わる設問でした。今年の問題では、これらの基礎知識の有無が明暗を分けたと言えるでしょう。漢文の読解力を養成することは言うまでもないことですが、句形や重要語といった基本的な知識も決して疎かにできないことは、この結果をみればよくわかると思います。

来年度以降の出題予想と対策

ここ数年、論説文の出題が続いていましたが、今年は一転して随筆の出題でした。しかし、理由説明の設問が二問あつたように、やはり論理的な思考力を問うてきています。今後、出題文がどういったジャンルの文章であれ、筆者(話者)の論理を読み取る読解力が要求されるでしょう。

句法、再読文字、重要語などの基礎知識の習得には万全を期す必要があります。具体的には、授業で扱う教材に出てくる句法、重要語等を生徒自身にすべてピックアップしてまとめさせ、自家製の「漢文便覧」を作らせるのも一計でしょう。

句を並べて絶句にまとめる

鈴木 淳次
 (漢詩サイト『桐山堂』主宰・愛知県立刈谷東高等学校)

この連載もいよいよ最終回です。前号まで、平仄の整った七言句(律句)を作る段階まで進んだということで、今回はその句を並べて絶句の完成まで行きましょう。

1 主題となる句を選ぶ

絶句四句の構成をどうするかを考える時に、まず最初の作業は「主題が最も表れているのはどの句か」を決めることです。それが作者の心情を表す抒情の句の場合もあれば、感動した風景を描いた叙景の句の場合もあります。どちらかにしなくてはいけないということではありません。

この主題句は必ず生徒自身で選ばせましょう。「主題」という言葉が分かりにくいようでしたら、「気合いを入れた句」「お気に入り」の句」という観点でも良いのです。最も思いが深く出ている句を、自分で決めることが第一歩です。

決めた句をどこに置いか、起句や承句の前半に置いて読者を一気に自分の世界に引き込む方法もありますが、一般的に結句が順当でしょう。通常、読者は起句から順に読み始めますから、一番印象に残るのは最後の句、余韻を残すのも結句となるからです。

2 起句・承句で押韻を合わせる

次に押韻の関係で、起句と承句を決めます。

七言詩では「初句と偶数句末で押韻」が原則ですので、絶句では起句・承句・結句が対象となります。

起句・承句は詩の前半で、叙景二句、あるいは抒情二句、大体似たような内容の句を置きますので、そうした観点で二句を選び、とりあえず、起句と承句の位置に置きます。

転句は押韻しない句ですので、末字は仄声にしなくてはいけません。これは該当する句がまだ完成していないでしょうが、先の起承の二句とは少し趣の異なる句を入れておき、末字は未定、簡単に済みそうならば仄字に直しておきます。

ここまでで、七言絶句の四句を配列できたこととなります。平仄はこれからですが、大雑把に言えば、韻を踏んだ古体詩としては形になりました。ひとまずは作品ができたということで、生徒をしつかり評価してやってください。

できれば、この段階の作品を一旦プリントアウトしておく、最終形までの推敲の過程が残り、生徒自身が創作の記録を保管できることになります。

3 絶句四句の構成を理解する

漢詩の構成の説明には「起承転結」の語がよく使われます。「起句で詠い出し、承句でそれを受け発展し、転句で一旦話題を変え、結句で全体をまとめる」と言われます。

たりアニメーション効果で平仄を示せば、作業の効率化と、一見煩雑な規則説明に対しても関心を持続させることができます。

また、次のような例題を示し、クイズのような形で生徒に考えさせるのも効果的です（平仄を記さないことも可能です）。

例題 空欄に適する語を下の語群より選びなさい。

除夜作	高適	(盛唐)
独不眠	寒灯	旅館
故郷今夜思千里	凄然	客心
又	何事	
	(明朝)	霜鬢
		一年

転句の二字目が平声ですから、これは仄起式の詩であり（起句六字目からも仄起式と判定できます）、更に、起句末字の「眠」を手がかりに韻目は「下平声一先」だと分かります。

一つの句の平仄を手がかりに残った句の平仄を決めていくという作業ですが、どこかの句の平仄が決まれば他の句の平仄も自動的に決まるということが感覚的に分かれば良いという目標です。

この他にも、起句だけ指定し、他の句は順序をバラバラにして示し、正しく並べ替えさせるなどの形式も考えられます。

5 平仄合わせと最終確認

平仄図をプリントして渡せば、後は生徒が自分の作品で平仄を確認し、漢和辞典を手にして合わせます。平仄合わせは、語順の入れ替え、別韻や両韻の同義語を探すなど（前号参照）と共に、

ここではより大胆に、句をまたがった語の入れ替え、時には二つの句を入れ替えるくらいの気持ちで臨みたいところです。

ただ、平仄にとらわれ過ぎて内容が当初の意図と外れてしまっただけではありません。できるだけ生徒の思いに寄り添うのは鉄則で、指導する側も同じ立場で一緒に言葉探しをしてください。

机間巡視の間に、少しずつ最終チェックを進めます。漢詩としての外形（体裁）を整え、確認する作業になります。

「起句の押韻踏み落とし（例詩：王維「九月九日懷山東兄弟」）」や「挾平格（例詩：李白「峨眉山月歌」）」などの例外規定もありますが、後に「規則外れ」と誤解されることの無いように、初めての漢詩作りでは、オーソドックスな規則通りの詩に仕上げておくべきです。

項目を列記しておきますので、できればチェックシートのような形で、先ほどの平仄表と一緒に生徒にプリントして配布すると良いでしょう。一句の段階では合っていた平仄も、語を入れ替えて検討しているうちに乱れてしまっていることもよくあります。

- ① 「二四不同」・「二六対」は各句で整っているか。
- ② 「四字目の孤平」になっているか。
- ③ 「下三平」あるいは「下三仄」になっているか。
- ④ 起承結で「押韻」し、転句末は仄声になっているか。
- ⑤ 「反法」「粘法」は守られているか。
- ⑥ 同じ字を別の句で使う（「同字重出」）ことはないか。
- ⑦ 国字（日本で作られた漢字）を使っていないか。
- ⑧ ⑥と⑦は初めて見ることもありませんが、この機会に指導で

きれば、漢字や漢詩に興味が広がるでしょう。

修正の過程では一語や一字に集中して考えますので、どうしても狭い見方になりがちです。時刻や場所、天候などが前半と後半で食い違ったり、複数の句に同じような趣向の言葉が重複して使われていたり、これらは当事者では気づきにくい点ですので、指導する側で詩全体を見通す日は持っていたいものです。

ただ、こうした内容の矛盾は別にして、表現面である程度の物足りなさがあっても、生徒が紡ぎ出した言葉を大切に、一つでも二つでも、良い点を探して評価する姿勢は持ってください。その上で、より良い表現を求める推敲の段階へと進んでください。最後に、紙数の関係で一首しかお示しできませんが、実際の生徒の作品と修正・推敲の例を紹介しておきます。

初夏即事

初夏即事

雨霽一庭緑色新
沙羅双樹落花塵
清風渡竹夏猶淺
午後幽情宜憶人

雨霽れて 一庭 緑色新たなり
沙羅双樹 落花の塵
清風 竹を渡る 夏猶ほ浅く
午後の幽情 人を憶ふに宜し

起句が四字目の孤平ですので、まず平仄の面で修正が必要です。五字目を平字にしても良いですが、ひとまず「一庭」の代わりとして「閑庭」「空庭」「庭前」などを考えました。

また、起句の「緑」は、「沙羅双樹」の花の白さとの対比を本人は狙ったようですが、色を直接出したため印象が強く、花の方がぼける感じで、「苔色」「叢色」など、物を表す語で考えました。

*漢詩サイト『桐山堂』(<http://tosando.ptu.jp>)からは、本稿で紹介した平仄チェックシートがダウンロードできます。

承句の「塵」は語感が悪いので、同韻から「頻」を探しました。転句では、前半に植物が並んだ関係で、「渡竹」がくどく感じ、風をもう少し具体的に説明する方向で言葉を探しました。最終的には、起句は「雨霽閑庭苔色新」、転句は「清風漸漸夏猶淺」となりました。

6 まとめとして

完成して提出された作品は、再度、指導する側で確認をしてから印刷をしましょう。生徒には貴重な記録になるでしょう。

漢詩は俗世と離れた風雅な世界を描くものという感覚が強く、時事を描くことを避けるという傾向もあります。しかし、未来を担う高校生が隠者、幽棲の詩を作ることには私は違和感が強く残ります。眼前の景、そこにある自然の風物の趣への感受性も育てて欲しいと同時に、同じく、目の前の社会や人間へも関心を高めてくれることを願っています。

昨年は未曾有の災害に遭遇し、誰もが大きな悲しみを背負いました。私の主宰する漢詩サイト『桐山堂』への投稿詩でも、東日本大震災に関する詩が沢山寄せられました。詩を書く人間としてどうしても思いを言葉に託したい、表現しなくてはいけないという気持ちひしひしと伝わってきました。

漢詩は千年以上昔の言葉と文法と規則に従う伝統文学ですが、その古い器に新しい思いを盛ることは、漢字を用いている私たち日本人にとって決して困難なことではありません。ましてや、若い高校生にとっては、導入のきつかけさえあれば、漢詩も自己表現の一つの手段に十分なり得るのだと信じています。(完)

昌平坂学問所から日本学士院へ

田山泰三
たやま たいぞう
 (英明高等学校)

寛政二(一七九〇)年、寛政の改革の環として時の老中松平定信公は儒者柴野栗山と共に「寛政異学の禁」を実施、幕府の教学政策として朱子学を奨励、「聖堂学規」を整え昌平坂学問所を幕府教学機関として成立させた。また尾藤二洲、古賀精里といった外部からの儒者も学問所の教授として招き、栗山と併せ「寛政の三博士」が昌平坂学問所での指導を勤めるようになった。

「寛政異学の禁」は「寛政の学制改革」と定義づけられる改革である。定信公が柴野栗山を登用したのは、栗山の手になる提言『栗山上書』を定信公が読み、改革の精神基盤としたからだといわれる。『栗山上書』の執筆は宝暦十三(一七六三)年、栗山二十八歳の頃。

文中には若き栗山の政治及び学問に対する様々の献案が豊富な事例と共に鋭い表現で綴られている。同書中栗山は「恩威文徳」を強調する。「恩威」の「恩」とは人に対する慈愛、思いやり。「威」は自らの姿勢を崩さぬこと。そして「恩威」の本質を知るためには「文」が必要であり、その上で古今の「文」に語られている「徳」というものを知らなくてはならない。この「文徳」というものが「恩威」を推しすすめるために人が備えておかなくてはならない資質であると説かれる。こうして、「恩威文徳」の精神のもと、昌平坂学問所が日本における学問の最高機関として位置づけられ、旗本をはじめ地方藩の優秀な藩士も入門し

藩の知的水準の向上と教育の普及発展につとめるようになる。

天保三(一八三二)年五月二十六日、江戸麻布丹波谷に中村正直が誕生。少年時代の正直は神童の誉れ高く、十六歳で昌平坂学問所に入学、ここでも抜群の優等生で安政二(一八五〇)年に抜擢され学問所教授出役を命じられる。激動の幕末期、中村正直は幕府派遣のイギリス留学生監督として渡英、帰国後明治三(一八七〇)年にサミュエル・スマイルズの『Self-Help』を翻訳し『西国立志編』と題して出版した。この『西国立志編』は福沢諭吉の『学問のすずめ』と共に維新の青年達の間で大ベストセラーとなる。

明治六(一八七三)年、西村茂樹、森有礼らが中心となって「明六社」を発足させる。この「明六社」は後に第一次伊藤博文内閣で初代文部大臣に就任する森有礼がアメリカの「ソサエティ」を目指して発案した日本で最初の自発的結社であり学会でもあった。「明六

社」では月二回の会合を開き講演を重ねると共に『明六雑誌』を発行し自由な言論を展開した。

この「明六社」の精神が「東京学士会院」に受け継がれる。明治十一(一八七〇)年十二月九日、田中不二麿文部大輔は中村正直、福沢諭吉をはじめ西周、加藤弘之、神田孝平、津田真道、箕作秋坪みづはるしゅうへいといった当時の知識人七人を私邸に招き、東京学士会院設立に關する諮詢書と「東京学士会院規則大



柴野栗山像 (栗山顕彰会提供)

意」を示し、七人はこれを読み賛意を示して花押を記す。注目すべきはこの七人すべてが旧幕臣であり、時代を代表する思想家でもあったことである。

翌明治十二(一八七九)年一月十五日、田中不二麿は文部卿を代行してこの七名に「東京学士会院会員」の報状を交付。同日文部省修文館にて第一会が開催され、互選によって福沢諭吉が初代会長に選出された。この「東京学士会院」が明治三十九(一九〇六)年に「帝国学士院」に生まれ変わり、明治四十四(一九一〇)年、明治天皇からの御下賜金をもとに「学士院恩賜賞」が創設された。「世情が激変しても絶対に姿勢を変えない」という強靱な精神力の伝統のもと「帝国学士院」は太平洋戦争中も總會や部会の開催、論文の発表や紹介、授賞式の挙行などの事業は一度も中断することなく行った。戦後昭和二十二(一九四七)年「帝国学士院」は「日本学士院」となり現在に至っている。

さて「学士院恩賜賞」が第一回受賞者になる木村榮博士「地軸変動の研究特に(乙)項の発見」に贈られてから一世紀余。実は現日本学士院の久保正彰院長は古高松久保家十代目の当主にあたる。久保家の祖である久保桑閑(二七〇〜一六三)は、古高松で仁医として知られ柴野栗山の父柴野軌達ちのりの親友で栗山を物心共に応援した人物である。また若き平賀源内を書生として預かり、自身の長崎行に源内を同行し西洋の学問や芸術に触れさせた。

二〇〇八年、〇九年十二月一日、高松市で行う柴野栗山を偲ぶ集い「栗山祭」のため久保正彰先生は帰高、貴重な講演をされた。高松市牟礼町の柴野栗山を顕彰する団体「栗山顕彰会」は久保院長の講演に資料を加え『父たちの語らい』として出版した。昌平坂学問所から日本学士院へと繋がる伝統には、強靱な精神力に裏付けられた学問に關する強い信念の裏付けが存在するのである。

諏訪原 研 著

『漢文とっておきの話』

(四六判・並製三頁・本体一、九〇〇円 大修館書店)



漢文が魅力的な世界だと知った生徒なら、「なんで漢文やるの?」とは言わない。言わないどころか、週に一コマの漢文の時間を、他では望んでも得られない《人間洞察の深さと表現のキレとを味わう絶好の機会》だと待ちこがれるようになるものだ。

生徒たちはほんとうに「漢文が好き!」になるのだけれど、教師は窮屈なカリキュラムの中で、面白さ以前にまず約束事を……「終点」までの時間が気になって仕方がない。教室には、悩ましい現実がいつぱいだ。

諏訪原研著『漢文とっておきの話』が出たのを書店で見て、迷わずレジへ向かった。手にした瞬間、氏の第一作『ちょっと気の利いた漢文こぼなし集』の愉しさがよみがえってきたし、確かにこれはその続編に当たる。

私はこの新刊本を楽しく読み進みながら、

そしてそれが一般読書人向けに書かれているにもかかわらず、最もこの本の恩恵を受けるのは多忙をきわめる高校の先生方かもしれないな、などと思った。

本書収録の二十四話はすべて近年の大学入試に出題された文章およびその関連から採られている。訓点つきの漢文、書き下し文と簡単な語注、正確でこなれた口語訳、そして達意の解説から成るのだが、たとえ「為:所」は受身で、といった類の注釈はことごとく表面から消されており、話の展開そのものを丁寧に楽しく追うことに徹している。「とっておきの話」といっても、いろんな意味で隔たりもある世界だから、導入には気を使うし、時代背景をはじめ解説を要する事柄は多い。それも濫蓄を傾ければいいというものではないし、匙加減が難しい。そこで著者は「庖丁」よろし

く、そんなあれこれを手際よく捌き、材料を吟味し直し、いい味に仕上げ、もちろん盛り付けにも気を配る。

「ウナギがしゃべった」という短い怪異譚(新潟大出題)が紹介されている。出典は芥川も愛読した愈越(清)の「右台仙館筆記」。本文が「日本人はウナギを好む」というのを受け、著者は万葉集、家持の戯れ歌を引いて古来そうなのだと例証する。ウナギは捕まえるのも捌くのも厄介だが、

解説には鰻屋が使う道具のこともチラと見える。一夜、水槽に飼っていたウナギたちが酔客の声に反応して喋った。鰻屋の主人は恐れをなし、即刻廃業した:で話は呆気なく終わるのだが、著者は、実際にはありえないこんな話に「ことほどさように、ウナギは神秘に満ちた生き物だということなのだろう」——そうさりとコメントを付けた上で俄かに話題を転じ、ずっと不明とされたニホンウナギの産卵場所がわが国から二〇〇〇キロも南、マリアナ諸島西方沖の限られた海域であることを突きとめた二〇〇九年の大発見で一話をしめる。

濃厚なウナギ料理の後には、さっぱりとしたデザート。信頼の置ける確かな読み、著者の豊富な蓄積とバランス感覚、そして厭味のない味わいがうれしい。(田口孝雄)

定価〓本体十税5%(2012年5月現在)

木之内誠 編著

『上海歴史ガイドマップ 増補改訂版』

(A5判・上製 三〇三頁・本体三、三〇〇円 大修館書店)



中国でも知る人ぞ知る評判の地図。その待望久しい増補改訂版がついに出了。本書を手にした中国の友人はみなそのすごさに唸る。何しろ清末の開港らしい存在した、

調べられる限りの建築物、道路、運河、交通機関などを、ほとんどすべてこの地図で見ることができる。しかも、それが一九四九年以降どう変わり、現在はどうなっているか、変遷が一目で分かるように示されている。表示は建物の形状まで彷彿させる立体表現である。読者は過去と現在の空間を併せてヴィジュアルに体感できるはずだ。

本書の丹念な表記からは、それぞれの時代の出来事や生活の場面が甦ってくる。魯迅や孫文、スメドレーなど中国の歴史を彩った人物はもちろん、金子光晴や武田泰淳ら日本の文人たちが上海のどこに住んでいたか、横光利一が長編小説『上海』で描

いた「トルコ風呂」の並ぶ街角はどこかまで記されている。学校や映画館、レストランなどかつて生活を彩った場所も一つひとつ確認できる。

また、主な地点は、解説編に簡潔な説明と現在の写真が付され、そこで何があったのが紹介されている。資料編にはその出来事を中心にした年表がついており、参照資料の文献はそのまま優れた上海のブックガイドでもある。

都市としての上海はこれまで三度大きな変化を経てきた。一つは開港から第二次大戦までの東洋最大のモダン都市上海。もう一つは高層ビルやショッピングモールが建ち並ぶ現在の巨大経済都市上海。ただ、その二つの時代の間に計画経済下の工業都市上海があったことはあまり語られない。一九四九年以降、上海には多くの工場や新

村(団地)が建設され、大量の労働者が流入した。人民広場など巨大な集会の空間が生まれたのもこの時期だ。八〇年代以降それが一掃され、現在の上海が生まれた。

戦前の繁華な上海は外地から移り住んだ中国人と外国人の都市だった。多くの人にとつてそこは終生の住処ではなかった。だが、四九年以降流入した労働者たちはそこに定住した。上海で暮らしてきた二代目三代目とともに、彼らが「上海人」という意識を形作ったといつても過言ではない。農村と都市の戸籍が峻別されたことで、その意識はいつそう強化された。近年、王安憶など上海在住の作家がこの時期の上海を描き始めている。上海を語る上で忘れることができない時代なのだ。

表記が一九四九年以前と以後という区分になっているため分かりにくいのが、本書はこの時代のことも記述している。その意味では、オールド上海や現在の上海だけに注目しがちなわたしたちの欠落を埋める可能性を秘めた労作でもある。

巨大都市上海は今も絶え間なく変化している。著者はその変化も追い続けており、ウェブ版の公開も視野に入れているという。本書の進化とともにわたしたちの中国理解が深化することを期待したい。

(千野拓政・早稲田大学)

尼ヶ崎 彬 著

『近代詩の誕生——軍歌と恋歌』

(四六判・上製・三六頁・本体三、〇〇円 大修館書店)



現代のわれわれ自身の先入観の問い直しをさせてくれる本である。

着眼がすばらしい。著者が目を付けたのは、今の日本で「詩」と認識されているものが、どのようにして生まれたのかという問題である。

時代が明治へと変わり、近代的な国民国家にふさわしい「詩」を作ろうとした人たちがいた。彼らは、その詩は、身分的エリートのものであった従来の「詩」すなわち漢詩とは異なる平易な言葉で、ひとまとまりの思いを綴るものでなければならぬと考えた。それを彼らは「新体詩」と呼んだ。「新体詩」を世に送り出すにあたって彼らが参照したのは、西洋の詩である。

ところが、「新体詩」には、まもなく強力な批判者たちが現れる。「新体詩」の作者たちよりも西洋の詩に通じていると自負

していた人たちである。批判者たちが正しい詩だと思ったのは「芸術のための芸術」の代表としての詩だった。これが、今の日本で一般に「詩」だと思われているものである。しかし、日本での「詩」の形成には重大な問題が生じている。

そもそも、「芸術のための芸術」という考え方は、十九世紀という一時期に、西洋社会のなかの一部で優勢になった立場にすぎない。それが、日本に移植された際に肥大した。なんのことはない、身分的エリートの特権物だった「詩」が、精神的エリートの特権物としての「詩」になってしまったのである。

その重大な結果として、「芸術のための芸術」という枠組みから外れるものは「詩」でないものとして、切り捨てられてきた。「新体詩」自体がその一つである。

著者は、「新体詩」とその創設者の一人だった外山正一に目を向ける。文学史のなかでは、どちらも軽視されてきた存在である。しかし著者は、とりわけ外山の試みが含んでいた可能性に注目する。

外山が一貫して追求したのは、平易な表現と感動という二つのものである。どちらも、「芸術のための芸術」派の目指したものと正反対である。

外山は、庶民の立場に立つて詩を書き、新しい見方を広めることができた。たとえば、日陰の存在だった陸軍の喇叭手(名は白神)が、瀕死の重傷を負いながら喇叭を吹き続け、精神の尊厳を示したことへの感動を表すような詩である。「……白神はただただ喇叭手なりしなり。喇叭手の最期は。実にかくの如くなりしなり。」

近年、たとえば美術研究の分野では、陶磁器などを「工芸品」として、広告イラストなどを「商業美術」として「芸術」から排除してきたことへの反省が進んでいる。著者は、同様の見直しを詩についておこなったのである。

この重要な主題を扱う、豊かな内容の書を、著者は軽やかに説き進めている。

(鳥越輝昭・神奈川大学)

定価〇本体十税5%(2012年5月現在)

七言一句から始める漢詩の指導

鈴木 淳次
すずき じゆんじ
 (愛知県立刈谷東高等学校・全日本漢詩連盟評議員)

十年程前、私の漢詩創作授業の報告(注1)を本誌一八五号に載せていただいたことがありましたが、その後、しばらくして、その小文を参考にして古典の授業で漢詩創作をしたという作品集を京都の高校のM先生からいただきました。高校生としての日々(注2)の思い、自分の将来への期待や不安、眼前の風物に対する若々しい感覚などが、押韻平仄ともに整った漢詩に素直に詠みこまれていて感心しました。

機会があつて、全日本漢詩連盟会長の石川忠久先生と一緒に高校を訪問し、生徒たちとの懇談の時間も作っていただきましたが、どの生徒も漢詩の実作への苦労とともに、「最後の頃は、漢和辞典を引くことが楽しくなった」と口にしていました。

また、静岡の中学校のN先生からは昨年、体育祭をテーマに、先生自らが(初めて)作った絶句を用い、転句だけを空欄にして生徒に埋めさせるという句作指導の工夫、そこから自由題での絶句創作まで発展させた国語の授業実践のお話もうかがいました。自由題の作品集は、サッカー、ゲーム、お笑い芸人から幻想的な空想世界まで題材の幅が広く、現代の中学生の興味や関心、心の動きが感じられ、漢詩の一字一字からは「今現在の自分自身」を表そうという意欲がにじみ出てくるような思いがしました。

漢詩創作は、基本的に唐の時代に確立された近体詩の形式に則

り、韻律や文法、用語もその頃に合わせることでとされているため、実際に創作指導を試みようとしても、生徒以上に教員の方がハドルの高さを感じてしまうことが多いのではないのでしょうか。形式の整った漢詩を完成させなくてはいいけないという意気込みでしまいがちですが、「漢和辞典の使い方や漢文の文構造に慣れさせる」、「漢字の意味の違いを理解させる」、あるいは「漢詩の構成を覚えて読解に役立てる」など、通常の漢文指導の中の一つの方策くらいに考えて始めた方が肩の力も抜けます。

焦らずに、出来ることから始める。創作指導は長い視野で一步步手順を踏むことと、指導者も一緒になって創作の過程を楽しむことが何よりも肝要です。

本稿では、授業の数分間を利用し、生徒も教員も取りかかり易い指導例をご紹介します。平仄などの規則の話は次号とし、まずは七言の句を作って愉しむことから始めましょう。

1 七言句のリズムに慣れる

漢詩の七言句は原則として、二字・二字・三字で切れ目ができる(「二・二・三のリズム」)ので、そのリズム感は理解できるように、また、押韻という形で句末の字が規定される漢詩の句作りの方法にも取り組めるようにしましょう。

「二・二・三のリズム」や押韻については、授業で漢詩を扱った

注1、注2、注3とも、筆者主宰の漢詩サイト「漢詩を創ろう 桐山堂」(<http://cosando.pfu.jp>)に掲載。

時に教えていることだと思いますが、この両方を理解させるには、私は七言絶句で句の切れ目を取り除いた二十八字を示します。

月落烏啼霜滿天江楓漁火對愁眠姑蘇城外寒山寺夜半鐘聲到客船

張繼の「楓橋夜泊」ですが、勿論、他の詩でも構いません。

このように漢字がずらずらと並んでいるだけでは教員でも意味をつかむことは難しいのですが、二十八字がヒントになり、七言絶句だと判断できます。そこで七文字ずつ四句に分けますと、それだけで随分意味が取りやすくなると同時に、それぞれの句の末字を拾うことで押韻の位置、働きがわかります。

更に、「二・二・三のリズム」で少し切れ目を入れれば、もう高校生でも大体の句意が読み取れるようになりますはずです。

月落烏啼 霜滿天。
(◎印が押韻字)

江楓 漁火 對愁眠。

姑蘇 城外 寒山寺。

夜半 鐘聲 到客船。

プレゼンテーションソフト等を使って、動きや色など視覚的な変化で示すと、生徒はより理解が早いでしょ。

2 韻目・韻字を決める

七言句の作成に戻りますと、あらかじめ用意するものは、

□□□□□□□□□□

と「二・二・三」で切った七文字分の空欄です。

韻目を指定するならば、その韻目に属する韻字一覧を添えます。

韻目について、ここで生徒に詳しく説明するのは煩雑さを加える

だけですので、「漢字を唐の時代の発音で分類し、同じ発音の字をまとめたもの」という説明で十分でしょう。もちろん、興味関心を持ち、意欲のある生徒には発展学習をさせたいものです。

煙沿鉛錠筵淵門鶯咽緣懸賢肩堅權虔拳乾鼎圈牽妍研捲玄弦絃
絃先千泉川遷船鮮專穿鑄錢宣仙箋扇旋詮詮然全前蟬煎禪天田
巔伝年燃辺編篇翩便鞭眠綿連憐連聯連 (下平声「先」の例)

* 太字は複数韻を持ちます。

3 主題は具体的な指示をする

何でも良いから自由に書いてみる、というのは実はかなり難しいことです。主題はある程度絞り、その時その時の季節や行事などを題として示した方が適当でしょう。その場合にも、「春」とか「正月」というような漠然とした題よりも、「春の野山の景色(春日郊行)」とか「正月の家族の様子(元日小景)」など、考える方向性を規定した方が作りやすくなります。

題材の幅を狭くすれば自由度が減り、生徒が発想し難くなるのではないかと心配されるかもしれませんが、身近なもの、眼前のものに心の目を向けることから詩は生まれます。特に、詩作(というよりも漢作文)に初めて取り組む生徒が対象ですから、道案内は丁寧な方が良いでしょう。

4 韻脚表を使う

下三字(韻脚)を例示して、その中から選ばせる方法もあり

ます。例えば、「春の景色」というテーマで、先ほどの韻字を用いた語群を示します。

この中から好みの韻脚を選び、七言句の下三字をまず決めてから上四字（二十十二字）を考えるという形になります。

言葉が先にあり、それに自分の気持ちを合わせるような印象で、生徒は違和感を持つかもしれません。しかし、最初から自分の心を漢字で全て表そうとするのはやや欲張り過ぎで、心と言葉をつなぐ練習も必要です。と同時に、言葉によって心が開拓される経験もしてほしいと思います。

韻脚例の多くは、高校生の日常生活とはやや離れた世界を描いているかもしれませんが、全く見たことが無いものばかりではない

〔韻脚例〕

夕陽 <small>タチ</small> 天 <small>テン</small>	故郷 <small>コキョウ</small> 天 <small>テン</small>	暗江 <small>アンカウ</small> 天 <small>テン</small>	欲明 <small>ヨクメイ</small> 天 <small>テン</small>	雨後 <small>ウゴ</small> 天 <small>テン</small>
薄暮 <small>ハクボ</small> 天 <small>テン</small>	雨声 <small>ウシヤウ</small> 連 <small>レン</small>	緑相 <small>リョウカウ</small> 連 <small>レン</small>	群壑 <small>グンカク</small> 連 <small>レン</small>	竹影 <small>チクカウ</small> 連 <small>レン</small>
掃晴 <small>ソウセイ</small> 煙 <small>エン</small>	雨如 <small>ウニョ</small> 煙 <small>エン</small>	草含 <small>クサカン</small> 煙 <small>エン</small>	鎖晚 <small>サマン</small> 煙 <small>エン</small>	草似 <small>クサニ</small> 煙 <small>エン</small>
起水 <small>キスイ</small> 煙 <small>エン</small>	雨帶 <small>ウタイ</small> 煙 <small>エン</small>	杏花 <small>キョウカ</small> 前 <small>ゼン</small>	草堂 <small>クサドウ</small> 前 <small>ゼン</small>	緑陰 <small>リョウイン</small> 前 <small>ゼン</small>
白梅 <small>ハクバイ</small> 前 <small>ゼン</small>	月影 <small>グヱツカウ</small> 前 <small>ゼン</small>	古寺 <small>コジ</small> 前 <small>ゼン</small>	千里 <small>センリ</small> 川 <small>カハ</small>	百花 <small>ヒャクカ</small> 鮮 <small>セン</small>
曲池 <small>キョクチ</small> 辺 <small>ヘン</small>	白雲 <small>ハクウン</small> 辺 <small>ヘン</small>	柳堤 <small>リウテイ</small> 辺 <small>ヘン</small>	水竹 <small>スイチク</small> 辺 <small>ヘン</small>	雨後 <small>ウゴ</small> 田 <small>テン</small>
引溪 <small>インセキ</small> 泉 <small>セン</small>	汲清 <small>キツセイ</small> 泉 <small>セン</small>	破昼 <small>ハチユ</small> 眠 <small>メン</small>	驚午 <small>カスノヒ</small> 眠 <small>メン</small>	鬪芳 <small>トウホウ</small> 妍 <small>ケン</small>
隔林 <small>カクリン</small> 伝 <small>デン</small>	隔花 <small>カクカ</small> 伝 <small>デン</small>	晚鐘 <small>マンショウ</small> 伝 <small>デン</small>	又嬋 <small>マタセン</small> 娟 <small>ケン</small>	春可 <small>シュンカ</small> 憐 <small>レン</small>

ヒント…例えば下の三字を、「白梅前」と決めたら、次に、その白梅の周辺の景色を想像して（「春風」「緑柳」「鶯声」「鶯声」「泉水」など）、上四字に入れます。

く、記憶や知識としては多少なりとも残されているものでしょう。それが言葉に触れることでイメージの中で昇華することは、予想されることではあるし、期待したいことでもあります。

とは言っても、生徒によっては見慣れない語句もあるでしょうが、それを教員があらかじめ説明するのは控えたいところです。「何となくイメージが合う」、「使つてある漢字が面白い」、それでスタートとしては十分であり、その語を使いたいと思うならばきつと自分で調べ始めるでしょう。

また、同じような句ばかりができてしまうのではないかと、危惧されるかもしれませんが、上四字にどんな素材を入れるか、その組み合わせ方は生徒個々で異なります。大切なのは、教員の側が似たような句からどれだけ個性を読み取れるか、です。

5 柏梁体聯句と二句一聯

ある程度の数が揃ったなら、内容を考えて並べ替えてプリントします。同じ韻脚が続かないようにするだけでも、ある種のストーリーが生まれます。天候や場所、時間などの食い違いがあっても、それが逆に場面の転換になりますから、一句ずつゆつくりと読んで想像力をフルに働かせましょう。

春曉 <small>シュンカウ</small> 鶯声 <small>ウシヤウ</small> 白梅前 <small>ハクバイゼン</small>	草廬 <small>クソロ</small> 戸前 <small>コゼン</small> 雨声連 <small>ウシヤウレン</small>
雨晴 <small>ウシヤウ</small> 梅発 <small>バイハツ</small> 春可憐 <small>シュンカレン</small>	千里 <small>センリ</small> 遠山 <small>エンサン</small> 雨如烟 <small>ウニョ</small>
曙光 <small>シュウカウ</small> 静閑 <small>セイカン</small> 汲清泉 <small>キツセイセン</small>	遲日 <small>チニチ</small> 鶯声 <small>ウシヤウ</small> 驚午眠 <small>カスノヒメン</small>
桜桃 <small>オウダイ</small> 万葉 <small>マンヤク</small> 百花鮮 <small>ヒャクカセン</small>	風鎮 <small>フウチン</small> 烏啼 <small>ウテイ</small> 夕陽天 <small>セキヤウテン</small>

このように毎句で押韻し全体を同韻で通したものは「柏梁体聯句」と呼ばれ、今から二千年も昔、漢の武帝から伝わる形式で

す。そのことを教えれば、生徒には漢詩の長い伝統に加わった実感が湧くかもしれません。

また、第一句と第二句、第二句と第三句、第三句と第四句というように、前後の二句ずつをひとまとまりにして連句のように読むことも、是非、試みてください。絶句の前半(起句と承句)にも見られるように、漢詩は二句を一聯としてとらえ、聯で一つの風景や心情を描き出すのが基本ですので、絶句の前半を見ているような読み方ができます。

あるいは、どの句とどの句を組み合わせると面白いか、という投げかけも良いかもしれません。

この段階ではまだ平仄は整っていませんが、素材を拾い出して、それを漢字(漢語)で表したという体験が重要です。また、二句をひとまとまりに読む感覚を身につけておくと、七言絶句の起句と承句を作る際に役に立ちます。

6 七言三句にも挑戦

更に、興味が湧いた生徒には、今度は別の韻脚で複数句作るように指導すれば、絶句完成にもう一步近づきます。

その場合、同じ韻脚を使うこととし、各句の役割(起承転結)を具体的にするために、例えば、下のようなプリントを渡します。

①②③の内容は厳密なものではなく、目安とか目標という程度で構いません。意図としては、「起承転結」という絶句の構成を多少意識して作らせるためで、①②は起句と承句にあたるとしてある程度似た内容になるように、③は結句になると想定して全体のまとめになるような内容になるように、という指示です。実際

七言の句は、原則として「□□□□□□□□」と切れます。

次の①～③の内容で三句、韻脚集から下三字を選んだ後、上の四字を入れてみましょう。

①「春の花や植物の様子」

□□ □□ □□ □□ □□

②「春の野山の景色」

□□ □□ □□ □□ □□

③「春を迎えた自分の気持ち」

□□ □□ □□ □□ □□

※下三字については、それぞれの句で異なるものを選んでください。

の内容が指示と異なっても、絶句に挑戦するというところまで仮に進めば、その段階でいくらでも修正はできることです。

それよりも、三句作ることで、生徒が「もう少しで絶句になる」という気持ちになれることの方がはるかに意義があります。

ただし、教員の側が焦ることは禁物です。個別指導ならともかく、多数の生徒を対象にした授業では、三句を作る段階にたどり着く時間や興味関心の深さは個々に異なります。生徒の反応を見ながら、季節が変わった頃に新しい韻目で再挑戦させ、継続的に徐々に句作り慣れるようにしていけば良いでしょう。

(以下、次号)

◆「韻目」「平仄」などの漢詩用語の詳しい説明、本稿での例示以外の「韻目韻字表」「韻脚表」については拙著『漢詩を創る 漢詩を愉しむ』(二見書房)か、漢詩サイト「漢詩を創ろう 桐山堂」をご覧ください。資料のダウンロード、ご質問等のメールも同サイトから。

一句の平仄を整える

鈴木 淳次
 (愛知県立刈谷東高等学校・全日本漢詩連盟評議員)

前回(本誌第16号)で、「七言一句から始める漢詩の指導」と題して、漢詩学習の一環としての創作指導の手順、とりわけ、短歌や俳句に比べて漢詩は創作指導に取り組みにくい実情を踏まえ、七言一句から始める具体例を示しました。

要点だけをまとめれば、①七言の句は、「二・二・三」のリズムで、②下三字は韻脚集を用いて韻目を共通にし、③できれば複数の七言句を作るといところまでの話でした。

今回は、出来上がった七言句の平仄を整える段階に進みます。平仄のきまりの概要、平仄を整える実践例、その際の指導のポイントをまとめましょう。

1 平仄とは

中国語会話を勉強された方は、現在の北京語(普通話)に「四声」という分類があることをご存知だと思いますが、漢詩で扱う古典語にも「四声」がありました。漢字語尾の発音の変化(声調)によって分類することは同じですが、古典語では、高く伸ばす「平声」と、上がったたり下がったたり詰まったりと何らかの変化をする「上声」「去声」「入声」の四種となります。このうち、「平声」のみを「平」、他の三声をまとめて「仄」と呼び、併せて「平仄」というわけです。

発音は時代とともに変化します。古典語が使われていた時代の

人々が実際にどんな発音をしていたのかは分からないことですが、個々の漢字についての当時の発音分類は残っていますので、現代の私たちでも「平」と「仄」、あるいは「四声」を見分けることは漢和辞典を使えば簡単にできます。

電子辞書の漢和辞典でも「四声」が表示されているものもありますし、インターネットが使える環境ならば私の運営する漢詩サイトでも平仄検索ページが用意してあります。

平仄に慣れるためには、実際に授業で扱った詩を用いて、生徒自身に平仄調べをさせるのが効果的です。

平仄記号は、○が平声、●が仄声を表すのが一般的です。

青山横北郭

○○○●●●

白水遶東城

●●●○○○

(李白『送友人』)

月落烏啼霜滿天

●●○○○●●

江楓漁火對愁眠

○○○○●●○○

(張繼『楓橋夜泊』)

その他に、生徒自身や芸能人の名前の平仄を調べたり、「漢数字の十から十で平声はいくつあるか」「虹の七色の平仄は？」など、興味が湧きそうな課題を用意できると作業も楽しくなります。

また、漢字を音読みした時に、語尾が「…フ」「…ツ」「…ク」「…チ」「…キ」となる字（「物」「国」「笛」など、但し「フ」は「蝶」「急」のように歴史的仮名遣いで）は「仄（入声）」になりますので、従来から「フツクチキは仄」として、平仄判断の時には便利な知識です。

生徒の生年月日や授業の日付、曜日、あるいは地名などの固有名詞を用いて漢字を並べておき、「入声」だけを見つけるようなクイズ的な課題も変化があつて面白いでしょう。

さらに、漢和辞典を生徒が開いたついでに、日本で「漢音」と呼ぶ音読みは唐の都長安の人々の発音を日本人（遣唐使）が聞き取ってきたものであることや、日本でも中国でもずっと、その唐の時代の発音（平仄）に基づいて漢詩を作ってきたという長い伝統についても、少し触れられれば良いですね。

2 一句の平仄のきまり

例えば、七言の句を口に出して読む時に、七つ並んだ漢字が全て高く伸びず「平声」だったとしたら、どんな感じがするでしょう。あるいは、逆に上がったりがつたりの「仄声」ばかりだったらどうでしょう。頭の中で想像するだけでも、「平声」ばかりでは単調な感じがするし、「仄声」ばかりだと慌ただしくて落ち着かないような気がしませんか。

詩を、音楽を奏できるように耳に心地良く響かせるために、句末の押韻に加えて、「平声」と「仄声」の配列を工夫しようと考えたのが、隋から唐の時代の人々でした。

一つの句の中の配列、詩全体の中での配列、そこから生み出

されたのが近体詩における「平仄の規則」です。

漢詩としてこれだけは大切という規則に絞ってお話しします。

最初は、一句の中での「平仄の規則」ですが、絶対に守るべき規則は次の二つです。

- ① 二字目と四字目は「平仄」を逆にする。（「二四不同」）
- ② 二字目と六字目は同じ「平仄」とする。（「二六対」）
- ①と②は、句のリズム（七言句の「二・二・三」など）に関わるものです。中国語は二字をひとまとまりにする傾向が強く、漢詩でも二字ずつに少し切れ目を入れて読むので、その切れ目の「平仄」を互い違いにしようというものです。

この他に、③「下三連の禁（下三字全てを同じ平仄にしない）」④「孤平の禁（五言句の二字目・七言句の四字目が平声の場合、仄声で挟んで孤立させない）」が一句の平仄の規則としてありますが、この二点は授業の場面では初めから生徒に示す必要はなく、指導する側が理解しておけば良いことです。該当する作品が出てきた時、その段階で指導する形が良いと思います。

平仄の規則を実際の詩句で生徒に確認させる作業は省けません。前に平仄調べて用いた詩を再度使うのも時間節約の点では良いでしょう。しかし、時間に余裕があり、生徒が辞典を引くことにより抵抗がないようでしたら、より多くの作品に触れる意味で、異なる詩から例句を示すことも有効です。

ただし、今回は平仄の規則に合致した句をあらかじめ選んでおきましょう。特に、五言絶句や李白の詩には、古体詩に近く、近体詩の平仄の規則には合わない作品もままあります。あまり最初から規則の例外が多いのは、聞く方も説明する方もテンションが

下がりますので、事前チェックをお忘れなく。

平仄への興味づけでは、「推敲」の故事を私はよく用います。

苦吟派の賈島、面目躍如の故事ですが、彼が悩んでいたのは「僧□月下門」という句の二字目、「□」の部分です。月明かりの友人宅の門を僧（私）が「推」すのか、「敲」くのか。それぞれの字は、動作の違いを表すだけでなく、友人宅の門の大きさや形状、訪問の約束の有無、静寂感の深まり具合まで表しているときれ、議論の種が多い、楽しい話です。でも、どうして普段使う「押」や「叩」じゃないのか、疑問に思ったことはありませんか。平仄の説明をした後にこの故事を出し、先ほどの「押」「叩」の疑問を投げかけると、多くの生徒は「平仄の関係だな」とピンと来るはずですので、応用例としてお勧めします。

3 平仄を合わせる

さて、自分で作った句の場合には、その平仄を調べなくてはいけません。上記の規則に適合していれば平仄の整った「律句」として、絶句に使える句ができたこととなります。もし適合していませんでしたら、修正が必要です。

修正の方法は色々あり、語順や漢字を入れ替えるだけで済むこともあれば、同意の語に置き換える、場合によっては素材そのものを交換（例えば、花を鳥にしたり、山を雲にしたり、数を増減したり）することもあります。私の勤務校での漢詩講座受講生の作品を使って、具体例を少し示しましょう。

紅葉遠山夕陽明

紅葉の遠山 夕陽明らかなり

この句は「遠くの山の紅葉がきれいで、沈みかけた夕陽がきれいだ」という景を詠んだもの、平仄は「紅○葉○遠○山○夕○陽○明」となっていて、「二四不同」は良いですが、「二六対」が崩れています。

修正として「夕陽」を「夕日」に替える方法もありますが、ここではあつさりとして「遠山」と「紅葉」を入れ替えれば、修正後は「遠山紅葉夕陽明」となり、平仄は整います。

生徒は景を描くのに漢字を苦労して選び出して来ている。また、使った語句への思い入れもあるかもしれません。できるだけ最初の語句を生かす形で修正の方向を示した方が良いでしょう。

春風庭前百花鮮 春風 庭前 百花鮮たり

平仄は「春○風○庭○前○百○花○鮮」ですので、「二四不同」にするために「庭前」を「庭裏」と替えます。「裏」は「反対側」ではなく「内側・中」の意味、「脳裏」「胸裏」と同じ用法です。

山色黄落白露横 山色 黄落 白露横たふ

この句は「山の様子は葉が黄色く落ち、美しい露が広がっている」という意味です。平仄は「山○色○黄○落○白○露○横」ですので単なる入れ替えでは済みません。生徒の思い入れということでは、「黄落」「白露」は色の対比が工夫されていますので残したい言葉でしょう。

となると、「二六対」を生かして「黄落山色白露横」とまず入れ替えて、中の二字について、「二四不同」と「四字目の孤平の禁」に合わせて、二字とも平声になる方向で考えます。「山容」「山光」のような同義語を入れるのも案ですが、情景を深めるた

めに、私は「黄落山寒（山寒くして）白露横」と例示しました。

4 平仄合わせは共同作業で

平仄のために詩句を修正するという指導には、漢詩の語彙力と経験、そして、詩的創造力や感性が求められます。教員は読書経験は豊富でも、漢詩創作の経験はほとんど無いのが実際かと思えます。指導という立場ではなく、できれば生徒と一緒に、平仄を整えるために辞書を何度も引き、工夫したり悩んだりしながら、生徒の感覚を共有してほしいと思います。

私の主宰する漢詩サイト『桐山堂』(<http://tosando.pfu.jp/>)では、一般の方からの漢詩の投稿を受けつけ、掲載時には特別な場合を除いて全ての詩に私の短い感想を添えています。これまでに三千首余り、初心者からベテランまで幅の広い方々の作品ですが、一貫して心がけているのは、作者が描こうとしている世界、作者の感動がどこにあるかを見ることです。

その上で、作者の思いが言葉として十分に表現されているかどうか、もっと良い言葉、もっと効果的な句の構成はないか、自分が詩作をするつもりで、いつも辞書や漢詩集と格闘しています。七言句の創作から一人でも二人でも漢詩に取り組もうとする生徒が出てきたら、是非先生方も、詩に籠めようとしている生徒の心を汲み取り、より良い完成を目指していただきたいと思えます。漢詩は、形式も厳格に整い、用語も中国古典語を用いるもので、現代の私たちから見れば、言わば「古い器」です。その「古い器」に高校生「新しい心」を盛ることの面白さ、楽しさは、一緒に学び、歩むことから生まれて来るのだと確信しています。

(以下、次号)

石川忠久

漢詩の講義

石川忠久 著

人生の折々にふれる漢詩の深い味わいを、中国文化への深い造詣をもとに、泰斗・石川忠久博士がわかりやすく語りかける。漢詩の世界を8つのテーマにわけて味わいやすく、好評の全国縦断講演会「名講義」を再現！

- 第一章 漢詩と人生
- 第二章 漢詩と自然
- 第三章 漢詩と風土
- 第四章 漢詩と社会
- 第五章 漢詩と紀行
- 第六章 漢詩と恋愛
- 第七章 漢詩と日本人
- 第八章 漢詩と歴史

◆四六判・290頁
定価2,310円(本体2,200円)



◎朗読CD(別売) 訓読の調子を味わい、漢詩原文のリズムを知るために、本書収録の漢詩から40首を選びやすく、日本語と中国語で著者自らが朗読。
◆定価2,940円(本体2,800円)

大修館書店

書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください。 ☎03-3934-5131